

アラビア語回文芸術の世界

—中世アラブ文学 アル・ハリール作『マカーマート』の二作品を通して—

はじめに

ここに翻訳紹介する二作品は右から（前から）読んでも左から（後から）読んでも同文となる回文を主題とするものである。回文はわが国においても、また中国や西欧においても存在し文字を単位になされている。もっとも文字と言っても西欧のアルファベットは表音文字であり、わが国の仮名は音節文字（か=ka）であることから、音節文字の方が2倍の負担がかかるという想定はできよう。アラビア語では子音のみが文字とされ、その子音に付される母音はshakl（枷）とされ、必要でない限りにおいては付されない。つまり西欧のアルファベットともこの点が異なる。この特徴は子音である文字のみの構成となるので、表記されない母音は自由であることになり、回文操作としてはより容易であることにも繋がる。第一作はこの文字単位の回文を主題とするものである。なお、この回文については筆者は既に「アラビア語回文芸術－言語芸術の視角的側面の追求（2）」（季刊「アラビア語」、第二号昭和56年10月豊文社、PP46～60）を活字化しているのでこちらも参照されたい。

アラビア語回文はこれだけではない。単語ごとの回文も存在するのだ。文字単位回文は in'ikās（転倒文、反射文）と用語されているのに対し、単語ごとにひっくり返って文を成り立たせている回文は qahqariyyah（後退^ずさり文、折り返し文）との用語を持つ。名詞のみの構成で、格語尾で主部述部を区別したり、動詞、前置詞句でそれを明別し、回文として成立させるには並々ならぬ才能を要する。第二作はこの単語ごと回文がテーマである。解説、註釈も参考にして味わっていただきたい。

その1 文字回文

第16話 「マグリブのマカーマ」より

本文訳

アル・ハーリス・イブン・ハンマームは語り伝えて言った：私はかつてマグリブ⁽¹⁾に滞在したことがあった。かの地に滞在中のあるマスジド（＝寺院）でマグリブ（＝日没）の礼拝を共に捧げた折のことだった。所定の礼拝行為を済ませた私は、それに続けて（敬虔な者が行なう）ナフル（＝任意の礼拝）⁽²⁾をも行なった。礼拝が済んで視線を横にやると、一団の人々がマスジドの隅の方に行き、余程親しき仲間同志と見え、他の礼拝者の群と分れるのが目に入った。彼らはそこで話題の酒盃を取り交し、学識の火花を散らし始めたのだった。

そこで私も、彼らの話の仲間入りをしたい欲望にかられた、そこから有益な言葉が引出せる

*中部大学国際関係学部国際文化学科

訳註

(1)「マグリブ」とは、アラブ世界を二分する分け方で、エジプト以東を「マシュリク」というのに対する概念である。北アフリカのチュニジア（ないしリビア）以西の国々をマグリブと称した。現在でもモロッコはマグリブの語を採用しているが、モロッコの国名自体マグリブの訛った言い方なのである。但し15世紀末までアラブ領土であったスペインはこの範疇に無く、アル・アンダルスと呼ばれていた。

(2)「ナフル」nafīとは「余分なもの」の義で、この場合「余分な礼拝行為」の義である。イスラム教徒の礼拝は、ラクアの回数が尺度とされる。ラクアとは、真直ぐ起立した姿勢から坐して額を地面に接するまでの礼拝の行為様式をいい、日に五度の礼拝におけるラクアの回数は定まっている。定まったラクアで礼拝を行なうことを「ファドル」faḍlと言う。日没の礼拝のファドルは、ラクアを三度することであり、そのナフルは、預言者の伝承に基づいて二度のラクアをすることとされている。従ってここでは語り手アル・ハーリスは五度のラクアをして礼拝を済ませたことになる。

であろうし、教養も増すことができるだろうからと思って。私は彼らの座っている所へ、トゥファイル（＝不意の来客）⁽³⁾ のようにおしかけたのである。彼らに対して、「スイマール（＝果樹園の果実）を収穫するのでは無く、アスマール（＝夜話）の木の実を収穫しに来た者です。フワール（＝赤児ラクダ）の背の肉を求めるのではなく、ヒワール（＝話題）の逸なるものを求める者でございます。お仲間に加わらせて頂きとうございます」と声をかけた。すると彼らは、私のために円座の一部をといてくれて「ようこそ！ どうぞ！」と言いながら席をゆずってくれた。こうして私は座をしめたのであったが、その直後、それも目を奪う稲光りの一閃後とも、警戒心の強い鳥が水の中に嘴を入れて出す程とも、喻えられる素早さでもって一座の前に放浪者とおぼしき一人物が姿を顕わしたのである。〔図1～3〕

放浪者は肩に物入袋をぶら下げており、我々に二語の挨拶⁽⁴⁾ を送ってよこし、そしてマスジドには二回の会釈を行なったのだ。そうした後で、この男が口を開いて言うには「理解力ある皆さん、善良なる皆さん！ 最も尊い善行とは悲しみ（持つ者）を救ってあげることだということを知らないわけはありますか？ また最も確かで理由ある救済とは貧窮者に施しをなすことだということも？ かく申す私めは、あなた方の許へアッラーによって導かれ、あなた方に喜捨を求めに来た者でございます。まこと私めは、遠隔の地より逃れいでた者、飢えに悩む我が子達の使いとして参った者でございます。お集りの皆様方の中に、どなたか私達の飢えの熱病を癒して下さる方はおられませんでしょうか？」

一座の人々はこれに答えて言った、「旅の方、あなたはイシャーウ（＝日没から二時間程たった時刻、夜の礼拝の時間帯）を過ぎて参られた。それ故、我々の手許にはアシャーウ（＝夕食）の残りしかありませんのじゃ。もしそれでも良ろしいのならば、どうぞそれをお持ち下さい」。すると男が言うには、「災難に陥っている者としましては、食卓に散らばっている食べ物や食糧袋からこぼれ落ちた物を頂ければ満足でございます！」そこで座にある者は誰も、己の召使いに命じて、有り合わせの食べ物を彼に恵んだのだった。男は一同の親切さを意外に思い、一人一人に感謝を述べていた。そして坐って自分の手許に運びこまれる食べ物を見守っているのだった。

さて、我々の方は再び、教養の選り優ったもの、最高のものを引き出さんとして、またそれ

(3)「トゥファイル」Ṭufayl とは、もともと人名であったが、この人物は、どこかに祝い事があると、招待されたわけでもないのに、出かけて行って、相伴にあずかるのをこととしていたために、「招かざる客」、「不意の来客」の一般的意味にも用いられるようになった。「厚かましい」人物を指して、トゥファイルだと言われてもいる。

(4)「二語の挨拶」とは、al - salām 'alay - kum [あなた(方)の上に平安あれ] のことである。この挨拶は、アッサラームとも略されているが、普通イスラム教徒同志だけに許されるものとされ、異教徒からこの挨拶をされたイスラム教徒は、もし厳格な信者であるならば、その挨拶をたしなめるか、無言で通してしまう。異教徒との挨拶は sa'idah (幸せを!) とか、午前中ならば ṣabāḥ al - khayr (お早うございます)、午後から夕方にかけては misā' al - khayr (今日は、または今晚は) とかという。

(5)「インイカース」in'ikas とは、言葉遊びの一種で、日本流に言えば、「上から読んでも、下から読んでも、同音同義となる文」のこと。但し、以下の例から分るように、母音の配列は係わり無く、子音配列のみが対象

ぞれ(蓄えた知識)の泉から(教養の)水をあふれ出さんとして、座談を始めたのである。話題は(回り回って)ついにはインイカース(逆さ読み、回文)⁽⁵⁾の可能性に及んだ。インイカースとは、

س+ا+ك+ ب+ك+ا+س (Sākib ka's)

〈s+ ' +k+b+k+ ' +s〉(盃に酌ぐ人)と言うような類である。我々は智慧をしぼって、競い合った、インイカースの句をひねり出そう、未だ誰も作り上げたことの無い新作をものにしよう。その句を編み出す際に、最初のは三つの珠玉(=三語)をその首飾り(=その作品)の中に編み込まねばならず、その後の作者はその珠玉を順次増やしてゆかねばならない、という取り決めであった。それ故初めの作者の右隣りの者は四語ひねり出さねばならないし、左隣りの者は(右回りとなるために)七語をも編み出さねばならないことになるわけである。

語り手であるアル・ハーリスは語を継いだ：一座の人々は、今や掌の指の数(=五人)であることが確かめられ、その結合は洞穴の人々⁽⁶⁾のそれを思わせるものであった。ところが、私を大変困らせることになったのは、私の右手の御人が急いで一番手となってしまったのである。彼は(三語の珠玉を)編んで次のように公にしたのである。

ل+م+ا+خ+ا+م+ل لَمْ أَخْأَ مَلَّ

「飽きさせる兄弟(=者)を非難せよ！」⁽⁷⁾と。少し間をおいて彼の右手の御人が続けて次のように言った、

كَبَّرَ رَجَاءَ أَجْرِ رَبِّكَ ك+ب+ر+ر+ج+ا+ء+ا+ج+ر+ر+ب+ك

「汝が主の与える褒賞の期待を膨らませよ！」。やがて彼の(右手に)連なる御人が引継いで言った、

مَنْ يَرْبُ إِذَا بَرَّ يَنْمُ م+ن+ي+ر+ب+ا+ذ+ا+ب+ر+ي+ن+م

となる。当然字数が増える程、作文が難しくなるわけである。さらに日本語のそれと異なるのは語句毎に勘定してゆくために設定がより困難になる。例えば「タケヤブヤケタ」はアラビア語のインイカースの概念では、「タケヤブ+ヤケタ」の二語構成のみにすぎない。一座の人々は三語句を初めとし、最後の者は七語句のものを創り出さねばならない、としたわけである。

(6)「洞穴の人々」とは『コーラン』第十八章に記されている伝説上の人物達である。キリスト教では「エフェソスの七眠人」として知られ、聖者として扱われている。キリスト教が未だ認められていない時代に、隠れクリスチャンになった高貴な出の者達が、迫害を逃れて、一夜「洞穴」の中で過す。翌朝目ざめると、300年が過ぎており、キリスト教も公認されている時代となっていたために、人々から「聖者の蘇生」として崇敬されたという物語りである。『コーラン』では、彼らの数が、三、五、七人のどれかも問題にしているが、ここでは、人数の定まってを動かないことを強制的に喩えているのであろう。

(7) 原語の三珠は<l + m> + <' + kh + '> + <m + l>と言うことになる。第二珠はハムザと、長母音

「善行なし、それを全うした者には褒賞増さん!」。次いでしばらく後もう一人が、

س+ك+ت+ك+ل+م+ن+ن+م+ل+ل+ك+ت+ك+س سَكَّتْ كُلٌّ مِّنْ نَّمَّ لَكَ تَكِيْسْ

「汝に悪意もて語る者を皆黙らせよ、されば汝賢者とならん!」。こうして遂に私のところに番が回ってきてしまった。七つもの珠玉を持った糸を編まねば済まない破目になってしまったのである。

私はといえば、七語から成るインイカースを（他の人が公にする間も）頭をひねって創作ろうとしては壊し、考えついたかと思うと意に合わずにすぐに立ち枯れにになってしまうという状態がずっと続いていた。その間、（他の人に助けの）食べ物を求めはすれど、当然のことながらこの種類の食べ物を恵んでくれる人は見い出せず仕舞いであった。遂には（言葉を発する）息もつけなくなり、（割り当てられた題に答えられず）私の降服も明らかとなってしまった。そこで、私は一座の仲間に「ああ、この場にあのサルージュ出の方⁽⁸⁾が居合わせてくれたならばなあ! あの方ならこの不治の病を癒してくれようものを!」と嘆きの言葉を洩らしたものである。一座の人々もまた、「この難題をあのイヤース殿⁽⁹⁾の許に持っていったなら、我々を絶望から救ってくれようものをなあ!」と言い合っていた。七語以上のインイカースをひねり出すのは困難であり、（これ以上頭をひねるのは止めて）その思考の門を閉じることにしようというのが我々一同の意向の大勢を占めたわけであった。

ところが、である。我々の所に上りこんだ件の訪問客が、軽蔑的な視線を我々の方に投げかけているではないか! と言うのも、我々の知らない間に、（例の七語より成る）真珠の珠玉を編んでしまっていたのである。そんなものだから、我々の面目の無さを見てとり、（貧しい知識と才能の）浅瀬が乾き上るのを見てとると、我々一同に声をかけてきたものである。「一座の皆様方、不毛のもの⁽¹⁰⁾から何かを産み出そうとしたところで、それこそ大変難儀なことでしょう! また病い持ちから治癒を求めることも! まこと『あらゆる知者の上に、さらに知者あり』⁽¹¹⁾と申せましょう」と。こう言ってから、この客人は私の方に顔を向けて、語りかけてきた、「わしにあなたの代理をつとめさせてもらいましょう。あなたにふりかかった難儀を取り除けて進ぜよう。もしあなたが躓づかないように（との配慮から）散文で、とお望み

に用いられたアリフが同文字に、また第三珠はシャッダ動詞（重子音動詞）であるから実際には< m + l + l >の形式となり、インイカースにおいてはこの二点が許容されていることが分る。

(8)「サルージュ出の方」とは、主人公アブー・ザイドのことである。サルージュとはシリアの北方に在る町で、本話の主人公は、十字軍の町の占拠に伴ない、町から追い出された流浪者となっている設定である。

(9)「イヤース殿」とは、機智に富んだ逸話を多く残したバスラの法官イヤース・イブン・ムアーウィヤのことである。第七話の訳註（20）を参照。

(10)「不毛のもの」‘aqim とは、「子種を宿し得ない子宮」が原義である。これが女性に適用されて「石女（うまずめ）」の義に、また男性にも適用されて「子の持てぬ男」の義にそれぞれ転用される。女性を表わす場合でもこの形で用いられ、女性形語尾のター・マルブータを付す必要はない。更に「風」について用いられる場合、「雨または果実の結実を持たらない風」の義になる。本話のように「知性」について用いられる場合は、「無能な、非生産的な知性」の義となる。

ならば、次のようにおっしゃるのですな、^{けち}吝嗇を非難され、その非難（の回数）を増し給う方（=アッラー）に向って。即ち、

لَنْ يَكُلَ مُؤْمِلٌ إِذَا لَمْ يَمَلِكْ بَدَلٌ

ل+ذ+ب+ك+ل+م+و+م+ل+ل+ا+ذ+ل+م+و+م+ل+ك+ب+ذ+ل

（誰であれ、望み託せる人を避難所とせよ、財集め所有してはそれを散ずる人をば！）。またもし韻文でものすのがお好みとならば、崇めたてまつる方に次のように吟ずるのですな。

* * *

① أَسْأَلُ أَرْمَلًا إِذَا عَرَا وَارْعَ إِذَا التَّمَرَةُ أَسَا

かどつけ人が来たりせば

いくばくなりとも恵むべし

^な汝を傷つける人ありとせも

^{ゆる}許容すことこそ大度なれ！

② أَسْنِدْ أَخَا نَبَاهَةٍ أَبِينْ إِخَاءَ دَنْسَا

^さ性質高くして貴き人

かくなる人あらば敬愛ぐべし

されど^さ性質悪しく^げ下劣な者

かくなる徒には^か離るが良し！

③ أَسْأَلُ جَنَابَ غَاشِمٍ مُشَاغِبٍ إِنْ جَلَسَا

汝を^{よこしま}邪悪に^{いろ}処遇う者

非道のことのみに急ぐ者

かくなる者が^{すわ}同席るなら

(11)「あらゆる知者……知者あり」とは、『コーラン』第十二章第七六節の最後の句をそのまま引用したもの。有名なヨセフ説話の中で、ヨセフがエジプトを訪れ帰国する兄弟達に、父を連れて再訪させるべく、窃盜容疑をかけて弟のベンジャミンをエジプトに残しておく策をたてる。『コーラン』では、この策は、智恵者ヨセフから出たものでは無く、更に偉大な智恵者アッラーがヨセフに授けたものである、という内容のところである。

(12)「さすれば活力みなぎらん」の原語 taqawwa は、二人称男性単数 jussive でなければならず、tataqawwa が正しい語形である。未完了形を表示する接頭辞ターを ḥadhf (省略) し、全体を takhfif (軽便化) した、と説明されるが、この便法は明らかにインイカースに合致するために採られたものである。

(13)「サフバーン」、次話註 (2) を参照。

(14)「バーキル」Bakil とは、「言わんとすることが言葉にならない」または「どもり」で有名になり、「バーキル程に凸弁な」との諺を生んだ人物である。イヤード族出とも、マージン族出とも言われている。

(15)「にわか雨」の原語 ḥayan は、語根が「生きる」、「生活する」の義から分る通り、「大地をうるおし、その

その傍らを辞去すべし！

④ أُسْرُ إِذَا هَبَّ مِرًّا وَارْمِ بِهِ إِذَا رَسَا

静いごとが起るなら

そを鎮めんと努むべし

されど自然と治まらば

口出しせぬが良からまし！

⑤ أَسْكُنْ تَقَوَّ فَعَسَى يُسْعِفُ وَقْتُ نَكْسَا

沈着をこそ通すべし

さすれば活力みなぎらん⁽¹²⁾

たとえ逆境ありとせも

汝を助けるは沈着ぞ！

* * *

アル・ハーリスは語り続けた：この客人はその（美事な）韻文で我々を魅了し、その作詩の底深さに（それを吟味する）我々（の思考力）を疲れさせる程であった。我々は賛嘆の言葉を送ったのだったが、彼もまた見返りを求めてきた。そこで我々は、彼がもう十分と言うまで（身近にある金品を）褒美としておしめ無く与えたのである。彼は（褒美を受け終ると）身仕度を整のえ、（大きく脹らんだ）ジラーブ（＝旅用皮袋）を背に負い、立上って、次のような感謝の詩を吟じたのである。

* * *

一座に列なる皆様の 徳を讃えて申します

言辞にかけては真摯にて 寛大さにかけては王たると！

高く美しくその徳は 他の誰をも寄せつけず

話題となりて語られる 恵みの金品も数知れず！

共に語りて気付きしが あの雄弁なサフバーン⁽¹³⁾ も

大地の植物を成育させる」ところの「雨」という概念である。

(16)「大雨」の原語 wabil は、wabl と同義で、いずれも「度を越したもの」との意識があり、「大粒で大量に降る雨」、「どしゃ降り」の意味である。

(17)「二槍分の距離」の中の「槍」とは rumh のことで、この「槍」が距離の単位に用いられると、およそ 12 スパンとされる。1 スパンをおよそ 9 インチとして概算すると、一槍は「約 9 フィート」即ち「2 m 70 cm」、二槍では「5 m 40 cm」の勘定になる。アラブは長槍を用いる。1 フィートを文字通り「一步」とすると、主人公は、一座の人々から「十八歩」離れて戻ってきたことになる。

(18)「我が家」の「家」の原語は kinn が用いられている。この語の意味は、「女性・娘を人目に晒さないようにした所・部屋・家」である。人家では壁を利用して、カーテンで仕切った所、また地下に掘った室、また洞穴などがこれに当てられる。ここでは、卑下して自分の家をこう言ったのであろう。〔図 4 を参照〕

(19)「住まい」の原語 munakh とは「夜間駱駝達を足枷をして跪ずかせ、休ませておく所」が原義であり、更

この座にありては凸とした あのバーキル⁽¹⁴⁾になるが如！

物乞い一つも入り来て 一座に列なる我なるに

受けし金品^{ほどこし}数知れず 流れ落ちける雨の如！

もし寛大さ喩えられ にわか雨⁽¹⁵⁾ たらば皆様は

大雨⁽¹⁶⁾ たとえ喩えらる かくなることを我誓う！

* * *

この客人はこう吟じ終えてから、歩み去ろうとして二槍分の距離⁽¹⁷⁾まで足を運んだ。ところが、それから身の破滅を救ってくれるよう神に乞い願う文句を唱えながら、再び一座の許に戻ってきたのである。そして皆に語りかけるには、「おお、身寄り無い者に力ある支えとなれる方々、また身上潰した者に恵みの宝となれる方々！ 時刻は今や暗闇時になってしまいました。帰り行く道の様が定かではなくなっていました。我が家⁽¹⁸⁾に辿り着くまでには闇夜と消された道とが横たわっております。御無心なのですが、私が躓づかないよう、また道を明らかにしてくれるよう、ランプをお貸し願いたいのですが？」

語り手は話を続けた：その客人の所望のものが持って来られ、その炎の明りが一座の面々を顕わにした。と、その時である、私は気付いたのだ、我々を狩の獲物とした客人こそ、あのアブー・ザイド長老であることを！ そこで私は（さっそく）一座の人々に彼を紹介したのである、「この方こそ、先程私が言及した本人なのです。一旦口を開けば、狙いを違えること無く、雨を降らすよう頼めば、間違い無く雨を降らす、そういう方です！」と。すると一同は、その首を伸ばして長老の方に向け、（好奇心と讃嘆との）眼を彼の上に据えたのであった。そして彼に同席して共に夜を語り明かしてくれまいか、と頼み込むのであった。そうすれば貧窮している長老に対していくらかでも物質的援助をさせてもらうという条件を添えて。この申し出に、長老は、「あなた方の望むところはわしの望みでもあります。あなた方がわしを歓迎してくれたように、わしもあなた方の申し出を快く歓迎致しましょう！ ですが、既にわしがあなた方の許に向って来た時点で、わしの子供達は飢えにさいなまれ泣き叫んでおりました。すぐに帰ってくるようせがんでおりました。ですから、わしの帰りが遅れる程、飢え死にの心配が増すわけです。子供達のことを思わずして、わしの人生などありましようか？ そこで、一

に動詞 anākha は、「雌駱駝を、交尾させるために、跪ずかせる」ことを意味する言葉である。

(20)「脱穀場」の原語 baydar は、イラク方言だとされ、古典アラビア語では andar または kuds、'aramah が普通に用いられる。「小麦、穀類がその上で踏みつけられる場所」がその直義である。

(21)「もらう折……遅延すべし」の元義は、「急いでもって来るよう」と語りかけ、「後で・そのうちに」と返事をしなさい」である。アラブのいかにも商才にたけた考え方の一端を具現した表現である。この同じ考え方にたった有名な諺に、「物乞う時には急立てて、乞われる時には延ばしに延ばせ」というのがある。

(22)「害」の原語 afah は、個人的と云うよりは、集団、共同体全体にとって「害悪」となるものの意味である。それ故、イナゴなどの虫害、突風、竜巻、台風などの風害、作物や家畜を襲う害毒、人間を襲うペストや疫病などを具体的内容とする。同義語に 'ahah がある。＜イスラム共同体＞にとって「害」となる場合にも次のような流用をみている。「ザルフ（優雅さ）のアーファ（害）となるものはサラフ（度を越すこと）であり、イルム（学識）のアーファとなるものはヌヤーン（忘却）である」、「ハディース（会話）のアーファはカズィブ（嘘

旦那を帰宅させて下さい。我が子等の飢えをしのがせ、一息つかせてやりたいのです。そうしてから、あなた方の許に真直ぐ戻って来ましょう。そしてサマル（＝夜の閑談）を明け方まで存分にするように致しましょう」と提案したのであった。

（この提案に応じて）我々は若者一人に（彼の伴に出すべく）「この方の家族の所までついて行ってやりなさい、この方に早く帰って来て頂くためにな」と命じたのであった。命じられた若者は、長老のジラーブ（＝旅用袋）を腋にかかえて、彼の帰りを急がせるべくその後につき従って出かけたのであった。

しかし長老は、我々を待たせること、待たせること、我慢の限界を越えても未だ姿を見せなかった。漸くのこと、一緒にやった若者が一人だけ帰って来た。そこで「どうしたのかね、あの性悪な方は？」と問い直したところ、若者が言うには「あの老人は、うんざりする程、大通りと言わず小路と言わず僕を引き回したんです。で、ようやく辿りついたのは小さなあばら屋でした。老人は、『さあ、着いたよ、ここがわしの住まい⁽¹⁹⁾ じゃ。わしのひよこ共の巣というわけじゃよ。』こう言ってから、扉を開くように僕に頼んで、ジラーブ（旅用袋）をひたたくるようにして僕から奪い取ったんです。それから、『やれやれ、お前さんはわしの負担を軽くしてくれた。何か駄賃をやらねばなるまいな。そこでな、一つ処世訓を授けることとしよう、これ以上貴重なものは無く、これ以上有益なものは無いのをな！』こう言ってから老人は次のような詩を吟じたんです：

* * *

もし汝^{なれ}棗椰子^{なつめ}の木の実をば 刈り集めんとするならば
躊躇^{ためら}ふことのみ多くして 翌^{また}の年へと延ばしそ！
またもしなんじ偶然に 脱穀場^{たまさか}⁽²⁰⁾ に居合わさば
汝^なの収穫となすべきぞ 唐もろこしの耳なりとも！
もし目指すもの獲たならば 長居は無用^{おぼ}と思し召せ
さなくばなんじ陥いらん 仕掛けし敵の狩の罠に！
泳いで得んとするならば 遠出は無用と思し召せ
まこと人間^{ひと}の身安全^{やす}らかは 岸の近くに在りければ！

言)であり、イルム(知識)のアーファはニスヤーン(忘却)である。」いずれも預言者の伝承に収められている表現である。

(23)「害」、前註の「害」とは内容を全く異にする「害」である。ここで用いられている語 *hawas* とは、「半分気狂い」、「少々気が触れていること」を内容とし、前後の文脈から「徹夜をした(または重ねた)ために、頭がふらふらしていること、または精神異常をきたしたこと」をここでは意味させており、そうなるのを避けて身心を大事にしましょうと訴えかけているわけである。

もらう折には催促し 与える折には遅延^{のぼ}すべし⁽²¹⁾

即座に入手できる物品^{しな} 後払いにて買うが良し!

友をただ一人と限りて 頻繁^{しげ}く訪問^{おと}うことなかれ

人の倦むと言いて日をおかず 訪い来る者程倦むは無し!

* * *

あの方はこう吟じ終えてから、僕に言いつけたのです、『この戒めをお前の心の宝とするのだぞ、そしてその教えに従って日常の振舞いを行なうようにな! さ、それではお仲間の所へ急ぎ戻りなさい、主を念じながら! そして皆さんの所へ戻ったならば、良ろしくと言っていたと伝えるのだぞ。それから先程のわしの訓戒の詩を吟じてやってくれ! それにわしからのもう一言。無駄話でひと晩過ごしてしまうことは、(体にとって)これ程害⁽²²⁾となるものはありますまい。かく申すわしも(老齡故に)おのれの身体には気を使うもの。(徹夜などして身体のみか)頭にまで害⁽²³⁾を及ぼしたくはありませんのでな!』と、こう伝言を頼まれたんです」。

語り手アル・ハーリスはこの話をしめくくって言った:一座の面々は、アブー・ザイド長老の詩の内容を吟味した。そして詩の中に長老の悪意と狡猾さを読み取ったわけであった。我々は彼を逃がしてしまったこと、嘘偽によって美事にたぶらかされてしまったこと、を残念がることひと頻^{しき}りであった。それから、この会をお開きとしたのであったが、散ってゆく一人一人の顔には、取引に失敗した(という感じの)渋さを顕わに浮かべたものだった。

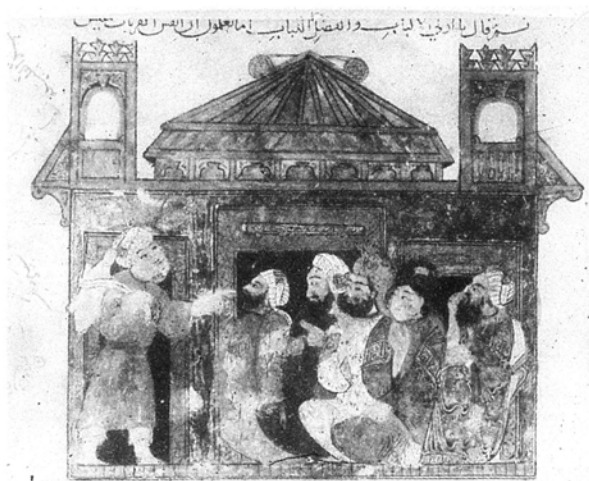
第十六話「マグリブのマカーマ」完



【図1】 サマル（夜の閑談）に入り込むアブー・ザイド。モスクの中、ランプは夜であることを現わす。アブー・ザイド杖を持ち、肩に旅用袋を負う。



【図2】 サマルの一团（左手隅）、入って来るアブー・ザイド（中央）。モスクの部分がより詳細に描かれている。ファナーウ（内庭）からの描写で、欄干（darbazin）及び欄間（shari'ah）上の格子模様（mushabbakah）が細かく描かれている。



【図3】 上と同じ状況がモスク全景を背景に。中央のドーム状の屋根の下が礼拝堂。両端の塔状のものがマナーラ（アザーンを唱える光塔）。アブー・ザイド左手から登場。



【図4】 我が家に着き、若者から自分の荷物をひたたく主人公。左手が玄関。奥が居間。階段は陸屋根に通ずる。屋上にはミルワハ（通風口）が設けられ休息ができるようになっている。階下には素焼のジュッラ（水壺）が置かれ、冷やした水が飲めるよう配されている。

〔訳者解説〕

本マカーマの圧巻は、主人公のインイカース（回文）の被露にある。七語構成のインイカースが作り出せずに諦めかけていたところに、脇にいた主人公が散文でまず公にし、次いで五詩行よりなる韻文でやっつけてしまう。著者アル・ハリリーはこれを作詩するに当って、どれだけの才知の労力を費したことだろうか。インイカースを主題とする本マカーマを訳すに際し、訳者はある感懐に捉われている。独学でアラブ文学を手探りしていた訳者に、カイロ・アメリカ大学に留学の機会を得、そこでの文学講座は願ってもないものだった。ワーキディーの研究で知られるM.Jonesは、Arabic Literature in translationで、難解なアラブ文学作品を平易な英語訳で解説してくれたし、詩とコーラン研究で有名なM.Nuweihhiはバッシャルとアブー・ヌワースの詩を中心に学生にアラビア語で研究発表させていたし、また若手のSulaymānは古典作品の粋をコピーしてきて、解説してくれたものだった。そのどれも、小生の学力不足と予習時間の不足とから、ついてゆくのが精一杯の毎日だった。Nuweihhi先生の授業で、割りあてられた分量の予習すべてができずにその旨言い訳すると、先生はこんなもので難かしいとネを上げては駄目だ。散文ですらマカーマートの中には右から読んでも左から読んでも文意が通ずる至芸の作品があり、言語の味はそうした段階にまで達しないと、言語芸術を分ったとは言えない、と悟してくれたものであった。この時に右から読んでも左から読んでも文意が通ずる文章がある、と聴いて驚いたものだが、この同じことを中世文学の所でSulaymān先生も指摘しており、決して奇をてらったものではないことが推察できた。それは一体どんなものなのか？ それから幾星霜……今こうしてそれ実際に接し、かろうじてアラブ文学の深い霧の中の一つの実体に接し得た感じなのである。

日本語でも言葉遊びとして、これに類したものは回文としてあるし、本稿で観たように芸術的昇華をしたものに和歌や連歌の中に見られる。日本では言葉遊びが中心になっているが、アラブでは日本の連歌の創作に似て、本話で観たように数人で規則を定めて創作し合うような、さらにはそれを詩にまで結晶させるような芸術化をみている。飽くことの無いアラブの知的好奇心は、このインイカースが聖典『コーラン』の中にもなされている箇所を探し出している。第二十一章三十三節「（太陽と月）共々天空に泳いでいる」の傍点部がそうであるし、また第七十四章三節「そして汝が主をこそたたえまつれ」の傍点部がそうである、と説いている。『コーラン』の奇蹟性を信じて疑がわぬイスラム教徒が、言葉の芸術の極地を追究するに際しても、『コーラン』の中でその実例を見い出そうとする、その心的態度にも別な意味で敬服に値するところである。なお、インイカースについては和文、欧文との比較を加えてアラビア語「回文」芸術として論及した拙稿があるので、

そちらをも参照されたい。(季刊アラビア語第2号昭和56年10月発行PP.44~60)

我々日本人と異なるアラブの慣習に、訳出するに際して気付かされた箇所があった。語り手アル・ハーリスも含めて五人がインイカースを作るに際し、「それ故初めの作者の右隣りの者は四句ひねり出さねばならないし、左隣りの者は七句をも編み出さねばならないことになるわけである」と言う件りである。これは、訳にも補足しておいたようにアラブの〈右〉偏重思考が作用したもので、何事であれ順番もまた無条件的に〈右〉回りと意識されていることに基づく。我が国でも順番は〈右〉回りが普通で、〈左〉回りは衣服の懷に入ってくるところから、「泥棒回り」などとも呼んだりしているが、しかし常に〈右〉回りという意識はアラブ程強いわけでも、一般的であるわけでもない。アラブの〈右〉回りという意識は、預言者マホメットのハディース(伝承)にもある。

(ハディース1)「飲み物が預言者の許に持たられ、預言者はそれを飲んだ。彼の右側には少年が、左側には年長者達が座っていた。彼が少年に『そなた、この飲み物を私の左側の人々に回しても構わぬか?』と尋ねたところ、少年は『アッラーの使徒様、あなた様のもとから私に来るべきものを他の誰かに譲るようなことはしたくありません』と答えた。そこで預言者は飲み物を少年の方に手渡した」。

(ハディース2)「水の入り交ったミルクが預言者のもとに持たされた。右側に遊牧民が一人、左側に(長老の)アブー・バクルが座していた。預言者はその水入りミルクを飲んだ後、残りを『右側が優先する』と言いながら遊牧民の方に回した」。

ハディースにこのように記述されているということから、我々は二つの事実を知ることができる。一つは古くブレイスラム期にさかのぼり右、及び右回りと言う慣行と概念とがアラブに根づいていたこと。もう一つはマホメットの言行はイスラム教徒の範とされたことから、この右、及び右回りの慣行と考え方がアラブを越えて全イスラム圏を支配するもの、となったことである。

今回の主人公の「稼ぎの場」は寺院である。今までにも寺院を舞台にしたものは、第七話「バルカイードのマカーマ」がそうであった。そこで主人公は礼拝前に既に参集している信者達を獲物としたのであったが、今回は礼拝後、寺院の片隅に好きもの同志が集まって知的会話を楽しむ、そういう知識人達を狙ったものであった。寺院は単に礼拝のための場所だけでなく本話のようにごく初期から信者達の集合場として、また教育の場としての機能を果たしてきた。そして仕事に関係せず、くつろげる日没や夜の礼拝後には機会ある毎にさまざまな集会が持たれるのであった。特に金曜のズフル(正午)の礼拝が終わった後では、その地の名士や宗教学者、また遠来の著名な学者などが、一つの柱を背にし、一段と高い椅子に坐って、その回りにあぐらをかきハ

ルカ（円座）を組んで聴きたい人々に宗教的講話や知的好奇心をそそる話などをしていたものであった。こうした大勢の人を集めなくても、魂の救済や人生相談を求めて個人的会話がそここで行なわれるのも、礼拝後の寺院の中でごく普通に散見できる光景である。

今回の稼ぎのプロットはなかなか凝っており、著者の細かい配慮が見られる。稼ぎは都合三度に及ぶことになる。最初は全くの〈喜捨〉にすぎたもので、参集者から〈あり合わせの食物〉を集めている。次いでインイカースの被露に及んで褒美として〈持ち合わせの金品〉を十分に獲る。また長老のインイカースの作品すべてが喜捨を求める内容であることにも気付かされる。そして最後は道が暗いからとして〈ランプ〉をせしめている。これらに加えて戻って来ると思わせて若者に己の荷を負わせ、使うべき〈労力〉を節約したことにもなっている。そしてプロットのなかなかの出来ばえだと思わせたのは、主人公の素姓を明らかにする件りである。時間的にも日没時が選ばれ、夜のとばりが降りてから後も寺院の淡い明りでは顔を確かめる程明るいわけではない。寺院を出ようとした人物が、ランプを所望して、それが持たられる。このランプが一同の顔を明るく照らした時、初めてその人物が主人公アブー・ザイドその人であったとした設定がとられているわけである。

ドラマ仕立としても、中々の出来とみて取れよう。

その2 語回文

第17話 「カフカリッヤのマカーマ」より

本文訳

語り手アル・ハーリス・イブン・ハンマームは語った。(私の故郷から) はるかに遠い所を旅した折、見た目にも好ましいある所で一団の若者達が目に入った。彼らの上には知性の印があり、闇夜に(輝く) 星々の美しさがあった。彼らは(折しも) 談論風発する議論の最中であり、相手をうち敗かそうと熱戦の渦中にあった。議論好き(の私の性向は、己ずと) 彼らの方に足を向けさせていた、議論の中味の甘さを期待しつつ。そして私は彼らの仲間に加わって、共の糸に己の身を縫い合わせた時、彼らは「あなたも(この議論の) 戦場に戦かおうとなさるので

訳註

(1)「井戸の中にバケツを投げ込む」は共に参加する、分け前を携かると言った意味の諺で、直訳は「(井戸の)バケツ(複数)の中に己のバケツを投げ入れる」。

(2) サフバーン Saḥbān. ウマイヤ朝初期の khaṭīb (説教家)、雄弁で有名。前話にも登場、註(13)参照。

(3)「獲物を射ち落とす」 aṣmā 原語は弓矢や槍での狩猟で、命中したが即死したかどうかを尺度とする用語である。というのも獲物が食用として許法かどうかでこれで決まるからで、① aq'aṣa (致命傷を与え、即死した)、これは食肉として許法である。② aṣmā (命中したが、しばらくは逃げ回り視界内で死んだ) これも肉利用は許法。③ anmā (命中はしたが視界から消え去った) この場合、別な場所で死体が見つかり、明らかな証しが無い限り食利用は不可となる。こうした尺度で用いられる用語なのである。

(4) 'iddah (待婚期間)、夫と死別又は離婚した女性は再婚するのに前夫との間に妊娠していないことを証明するため一定期間待婚しなければならない。普通三ヶ月間、又は三回の月経を経る期間とされる。ここでは十分

すか、(論争の)井戸の中にあなたのバケツを投げ込むお積りですか？⁽¹⁾」と尋ねてきたので、私は「いえいえ、私は戦いの傍観者に過ぎません、突いたり打ったりはできません者で」と断った。彼らは、私との問答を切上げて議論の再燃に入った、謎解きに取り組んでいたのである。この若者達のハルカ(円座)の真中に、一同の中心点には一人の老人が座っていた。その姿は世の荒波にうちひし枯れ、サムームの熱風に晒された様子で、その体たるや葦程にやせ細り、羊毛の刈り込み具程に乾ききっていた。にもかかわらずこの老人は、(この若者達の)問いかけに対し、答えを発するたびに驚異を連発しており、その発言の節々にはあのサフバーン⁽²⁾をすら忘れさせずにはおかなかった。老人の返答は一々正鵠を射るものであり、その戦場をとりしきる第一人者であることに私は驚ろきを禁じえなかった。どんな不明な点も明らかにし、何であれ狙った獲物はすべて射ち落としていた。⁽³⁾ そうこうしている内に(仕かける質問の矢の)矢筒も空になり、質疑も応答も止んでしまった。

さて老人は若者達の(知識の貯蔵が)空っぽになり、(沈黙の)断食に止む無きに至ったのを見てとると、新たに別な議論に誘って、端初を切り出す許しを求めてきた。一座の者達は老人に対して「それは良いこと！ だけど我々の誰がそれに答えられるやら！」と言うと、老人は切り出した、「そなた達はその大地が天ともなり、その朝が夕べともなる文体のことを知っておるかの？ 織機の両端から織られ、二色の色に染められ、二方向から礼拝され、二側面から始められる？ もしそれが東の方から昇ればその美顔はそなたを満足させようし、もし西から昇ればそれこそ驚異となろうもの！」と。

語り手アル・ハーリスは語を継いだ：一座の若者達は恰かも沈黙に打たれた如くになり、或るはまた「沈黙！」という語が彼らに課された如くであった。並居る者は一人として言葉を発すること能わず、誰一人としてその口の中に舌が無い状態であった。老人は若者達が家畜の如くおし黙っているのを、偶像のように無言でいるのを見届けてから、口を開いた「わしは既にイッダ(待婚)⁽⁴⁾期間の猶予をそなた達に与えてきた。時間の経過の締め⁽⁵⁾をゆるめてあげたはずだ。さー、ここに集いの場ができて上っている、決断の時ができて上っている。皆さんの知力が湧き上るならば賞讃されようし、またもしあなた方の知力の火打石が発火しないようならばわしが発火させてみせるが、どうじゃな？」一同が答えるには「誓って申し上げますが、私達は

な時間を与えたことの換論として用いられている。

(5)「締め」、原語 *tiwal* は「長いロープで馬や種ラクダなどの枷とする。ある程度の自由がきき、辺りの牧草などを食するよう配慮したもの。arxaytu la-hu aṭ-tiwala (私は彼に対してティワルをゆるめた) とは「拘束を解いてやった」意味となる。

(6)「かしこまりました」、原語 *sam'an la-kum wa-ṭā'atan* (あなた方の言うことを聞きました、従います)、慣用句。

(7) 三語構成、主語 + 述部 (名詞句)。反対から読むと *al-iḥsānu ṣanī'atu l-insāni* (性善なるは人間に創造されしもの)。

(8) 四語構成、主部 (名詞句) + 述部 (名詞句)。反対から読むと *fi'lu l-nadbi rabbu l-jamīli* (知るを足る者の行為は美行を教育するもの)。

(9) 四語構成、主部 (名詞句) + 述部 (名詞句)。反対から読むと *dhaxiratu l-ḥamdi shimatu l-ḥurri* (賞讃を

この(技芸の)海の大水を泳ぎ渡る能力はとても持合わせてはおりません。またその岸辺を逍遙することなどもできはしないでしょう。私達が考えあぐねた末どうせ徒労に終るものなら私達の思考を休ませて下さい。そして賞金を出しますからあなたの天与の才を披瀝して下さい！あなたが(産みの苦しみから)飛び上ったとしても、私達は同じ同情から飛び上がりましょう。もし(うまくできて)褒賞を求めるならば我々はそれを差し上げましょう！」と。老人はしばらく沈思していた。やがて口を開いた「かしこまりました。⁽⁶⁾ それではこれから私の言うことを書き留めて下さい。私の言うことを書き移して下さい。」(こう言い終えると以下のようなカフカリッヤ=折り返し技巧文を詠じ始めたのである)。(以下、原文 (1) (2) を参照)

①人間とは性善に創造られしもの。⁽⁷⁾ ②美行を教育する(の極地)は足るを知る者の身ぶり(素振り)にあり。⁽⁸⁾ ③高貴なる者の品性は賞讃を宝とするにあり。⁽⁹⁾ ④他人から感謝されるは自らの幸の結実となる。⁽¹⁰⁾ ⑤寛大さの宛先となれるは歓喜の光。⁽¹¹⁾ ⑥慇懃を励行するは真心からの愛情を要するもの。⁽¹²⁾ ⑦友情の絆は忠告を伴うもの。⁽¹³⁾ ⑧話に真実味持たせるは舌先を飾てこそ。⁽¹⁴⁾ ⑨弁舌の巧みさは(聴衆の)心の魅力となる。⁽¹⁵⁾ ⑩欲望のままに網張るは精神の破滅導く。⁽¹⁶⁾ ⑪被造物(=人間)の怠惰となれるは不徳の致すところ。⁽¹⁷⁾ ⑫邪しな願望は自制の効かぬがため。⁽¹⁸⁾ ⑬断固とした意志は身の安全の手網。⁽¹⁹⁾ ⑭難詰せんと粗探しするは欠点として最悪。⁽²⁰⁾ ⑮つまづくことを繰り返せば友情も滑り落ちることになろう。⁽²¹⁾ ⑯意図が真執ならば天賦の才をそのまま生かせよう。⁽²²⁾ ⑰贈り物を惜しみなくするは乞うことの対価となろう。⁽²³⁾ ⑱面倒な仕事をすすんで引受けるは報酬を容易にしよう。⁽²⁴⁾ ⑲神の加護を固く信ぜば日々の糧獲るに易し。⁽²⁵⁾ ⑳人の上に立つ者の優れたるは胸の広きこと。⁽²⁶⁾ ㉑支配者を飾るはその中傷者の憎悪もあり。⁽²⁷⁾ ㉒賞讃に価する行為への報酬は下賜品を散ずることである。⁽²⁸⁾ ㉓仲介(の成巧)へのマハル(婚資=報い)は必需品を(贈与品として)受取ることである。⁽²⁹⁾ ㉔迷誤の原因は目的のみが視野にあるため。⁽³⁰⁾ ㉕境界を越えることは劔のきつ先を鈍くさせること。⁽³¹⁾ ㉖礼儀を失するは善行を(したとしてもそれを)帳消しにする。⁽³²⁾ ㉗当然な権利を忘失するは抗弁を産むもと。⁽³³⁾ ㉘嫌疑に近づかぬは地位を高めることになろう。⁽³⁴⁾ ㉙(けれども己の)権威を高めるためには危険の

宝とするは高貴なる者の品性)。

(10) 四語構成、主部(名詞句) + 述部(名詞句)。反対から読むと istithmālu s-sa'ādati kasbu s-shakri (自らの幸の結実は他人から感謝されること)。

(11) 四語構成、主部(名詞句) + 述部(名詞句)。折り返し文 tabashiru l-bashari 'unwānu l-karami (歓喜の光は寛大さの宛先)。

(12) 四語構成、主部(名詞句) + 述部(動詞 + 名詞目的語)。折り返し文 al-muṣāfātu tujibu isti'māla l-mudārāti (真心からの愛情は慰懃を励行するを要する)。動詞は女性形に変化。

(13) 四語構成、主部(名詞句) + 述部(動詞 + 名詞目的語)。折り返し文 al-nuṣṣu yaqtaḍi 'aqda l-maḥabbati (忠告は友情の絆を伴うもの)。

(14) 四語構成、主部(名詞句) + 述部(名詞句)。折り返し文 ḥilyatu l-lisāni ṣidqu l-ḥadithi (舌先を飾るは話に真実味持たせる)。

中に身を投じること(必要)。(35) ③⑩地位の向上には神の摂理の助けも(必要)。(36) ③⑪振舞いの気高さは希求^{のぞみ}を少なくするにあり。(37) ③⑫思考を長くすれば智慧を磨くことになる。(38) ③⑬支配階級の長たるは政事を暇なく行なう者。(39) ③⑭些事に固執^{こじ}するは大事なものを失なうことになる。(40) ③⑮不測の事態に陥れば人それぞれの対応の違いを明かすもの。(41) ③⑯配慮に優けるは人の価値を高めるもの。(42) ③⑰使者に用向き多くするは使命を弱めることになる。(43) ③⑱不公平の乱用はおのづと畏怖^{おそれ}まき起す。(44) ③⑲忍耐の結果となるは勝利の果実。(45) ④①人を褒めそやして利あるはさらなる努力ひき出すこと。(46) ④②監視怠り無きは長き保身に十分(条件)。(47) ④③主人に対して常時の真心(を伝えるには)は召使い人の絶えることなく出仕するにある。(48) ④④雄男^{ますらお}ぶりを発揮するは信頼を保つことに通ずる。(49) ④⑤(義)兄弟を熟知するは危惧を軽減することになろう。(50) ④⑥敵を追い払うには友の助けあらばこそ。(51) ④⑦賢き者を試めすには愚かな者を共に混えてこそ。(52) ④⑧結果を見守ることは破滅を妨ぐことになる。(53) ④⑨醜聞から身を持せば名声は広まろう。(54) ④⑩下品なる墮落行為は誠実なる約束履行とは距離^{へだて}あり。(55) ⑤①高貴なる者の奥義は秘密を守るに際する時(に発揮される)。(56)

さて老人はこう書き留めさせた後、言い添えた、「さて皆さん、今までに200の語を用いましたぞ、教養と教訓とを含み込んでな。そのまま読めば誰も問題はありますまい。疑念も論議の余地もありますまい。さて所でこれらの文体を反対から読みたい方、その終りの方から引っくり返して読みたい方は、次のようにお読み下さい。〔以下、原文終りから□数字で始まる〕

⑤①秘密(守る)は高貴なる者の許に。(57)

⑤②約束の履行という奥義は下品なる墮落行為とは距離^{へだて}あり。(58)

⑤③名声を汚すことは醜聞を広めることになろう。(59)

それからこのようなやり方で語群を追ってみて下され！(逸脱は一つも無いはずだから)恐れる必要もない。この(折り返し技巧の)選り^え抜きの最後、真珠の玉の最後の文を言っておくと、⑤④性善としての教育は人間に創造されしもの⁽⁶⁰⁾となるはずじゃ」。

語り手アル・ハーリスはさらに語った：老人のこの唯一無比の折り返し文の書簡体が今や検証され、優雅な語法が点検された時、私達一同はこの作文がどれ程優れたものであるかを思

(15) 四語構成、主部（名詞句）＋述部（名詞句）。折り返し文 *siḥru l-albābi faṣāḥatu l-mantiqi*（聴衆の心の魅力となるは弁舌の巧みさ）。

(16) 四語構成、主部（名詞句）＋述部（名詞句）。折り返し文 *āfatu n-nufūsi sharaku l-hawā*（精神の破滅を導くは欲望のままに網張ること）。

(17) 四語構成、主部（名詞句）＋述部（名詞句）。折り返し文 *shaynu l-xalā'iqi malalu l-xalā'iqi*（不徳の致すところ人間の怠惰となれる）。*xalā'iq* は同音異義語。

(18) 四語構成、主部（名詞句）＋述部（動詞＋目的語名詞）。折り返し文 *al-wara'u yubāyinu sū'a l-ṭama'i*（自制は邪しな願望を追いやる）。

(19) 四語構成、主部（名詞句）＋述部（名詞句）。折り返し文 *zimāmu s-salāmati iltizāmu l-ḥazāmati*（身の安全の手綱は断固とした意志）。*zimāmu* はラクダを制御するための手綱のこと。

(20) 四語構成、主部（名詞句）＋述部（名詞句）。折り返し文 *sharru l-ma'āyibi taṭallubu l-mathālibi*（欠点と

い知らされ、神の御手による善意が御心のままにこの老人に与えたものと思えた程である。ややあって、居合わせた一同は老人の衣の端をつかんで持合わせの金品や貴重品のなにかが⁽⁶¹⁾を分け与えていた。（私も差し出すと）老人は私の金品を受取るのを拒んで言った、「わしの弟子からなど金品を受けとれんわ!」。私も（思わず）叫んで言った「ヤーアブーザイド殿じゃありませんか! 顔つき、体つきが随分変わられてしまって! ほほ肉がこけてしまったではありませんか?!」と。老人が言うには「そうじゃわしじゃよ。どれ程痩せようが、枯れようが、顔色が変わろうが、干上りようがな!」。私は老人の東に出没し、また西に出没しては（いつもの）奸計をめぐらせては（金品をせしめていることに）文句の一つも言う積りであった。すると老人は（私を制して）ハウラカ⁽⁶²⁾とイステイルジャーウ⁽⁶³⁾を言って逃がれ、己の傷ついた心中を詩で詠ずるのであった。

* * *

時節その劔を 我に向けて 抜き放つ
我を怖^{おど}しつけては きつ先鋭くす。
そして我が両の目蓋から その眠りを奪う
哀れなるかな 涙流れて止まず。

されば我地の果てまでを さ迷いつ
東の果てまで縦断し 西の果まで横断す。
いづこも同じのくり返し 東に日が出て
夕べに西に沈む これが我が毎日のこと!
かくて我 尾羽打ち枯らして 西に來し者
目指す故郷は はるけき遠く。

* * *

こう詠じ終ると老人は一座のもとを去って行った、衣の両裾を引き摺りながら、両腕を振りながら。⁽⁶⁴⁾残された我々はただ彼を見守るのみで、彼の姿を見送るだけであった。それから一同は（我に帰ると）躊躇^{ちゅうちょ}無く円座を解いた。そしてサバーの一団⁽⁶⁵⁾の如く四方に散って帰っ

して最悪は難話せんと粗探しすること)。

(21) 四語構成、主部(名詞句) + 動詞 + 目的語名詞。折り返し文 al-mawaddātu tudḥiḍu tatabbu'a l-atharāti (友情はつまづくことをくり返せば滑り落ちることになろう)。動詞は女性形に変化。

(22) 四語構成、主部(名詞句) + 述部(名詞句)。折り返し文 xulāṣatu l-atiiyyati xulūṣu n-niiyyati (天賦の才をそのまま生かせば意図が真執と受取られよう)。

(23) 四語構成、主部(名詞句) + 述部(名詞句)。折り返し文 thamanu s-su'ālī tahni'atu n-nawālī (乞うことの対価は贈り物を惜しみにくすること)。

(24) 四語構成、主部(名詞句) + 動詞 + 目的語名詞。折り返し文 al-xalafu yusahhilu takallufa l-kulafi (報酬は面倒な仕事をすすんで引受けることから容易となろう)。

(25) 四語構成、主部(名詞句) + 動詞 + 目的語名詞。折り返し文 al-ma'ūnātu tusannī tayaqquna l-ma'ūnati (日々の糧獲得は神の加護を固く信じれば易かるべし)。動詞が女性形に変化。

て行った。

第十七話「カフカリッヤのマカーマ」完

(訳者の補足) 著者の意図するカフカリーヤ(折り返し文)をここで補って訳出しておこう。原文の㉔から㉙までである。但し㉔～㉖及び㉙は本文にあるので、㉔から順次訳出していく。訳註の(7)～(60)、及び原文を参照して頂きたい。

㉔破滅から身を持せば(悪い)結果から妨がれよう。四語構成(以下、理りが無い限り、省略)、主部(名詞句) + 動詞 + 目的格名詞。訳註(53)参照。主語の位置に ittiqā' という男性形が来たので、動詞はそのまま良いことになる。

㉕愚かな者を見守ることは賢き者を混えてこそ。主部(名詞句) + 述部(前置詞句)。訳註(52)参照。

㉖友を試すは敵の助けも(時には必要)。主部(名詞句) + 述部(前置詞句)。訳註(51)を参照。

㉗悲しみを追い払うは兄弟を軽減する = 喜こばすことになる。主部(名詞句) + 述部(前置詞句)。訳註(50)を参照。

㉘ amānāt (ここでは信仰箇条、順文では信頼)を熟知すれば、雄男^{ますらお}ぶりも保てよう。主部(名詞句) + 述部(前置詞句)。訳註(49)を参照。

㉙奉行人振りを発揮するのには主人への絶えざる出仕すること。主部(名詞句) + 述部(前置詞句)。訳註(48)参照。

㊦ひたすら保身に努めるには監視を十分にすること。主部(名詞句) + 述部(名詞句)。訳註(47)参照。

㊧怠り無き努力は賞讃に価しよう。主部(名詞句) + 述部(前置詞句)。訳註(46)参照。

㊨利ある勝利は忍耐の果実なり。主部(名詞句) + 述部(名詞句)。訳註(45)参照。

㊩恐怖への強迫は強権(aḥwāl 順文では不公平)を顕わにする。述部(前置詞句) + 動詞 + 主語。訳註(44)参照。

㊪使命を乱用することにより使者は弱められることになる。述部(前置詞句) + 動詞 + 主語。訳註(43)を参照。

(26) 四語構成、主部（名詞句）＋述部（名詞句）。折り返し文 sa'atu ş-şadri faḍlu ş-şadri（胸の広きは人の上に立つ者の優れたること）şadr（胸、人の上に立つ者）は同音異義語。

(27) 四語構成、主部（名詞句）＋述部（名詞句）。折り返し文 maqtu s-su'āti zīnātu r-ru'āti（中傷者の憎悪は支配者を飾ることあり）。

(28) 四語構成、主部（名詞句）＋述部（名詞句）。折り返し文 baththu l-manā'ihī jazā'u l-madā'ihī（下賜品を散ずることは賞讃に価する行為への報酬である）。

(29) 四語構成、主部（名詞句）＋述部（名詞句）。折り返し文 tashfū l-masā'ilī mahru l-wasā'ilī（贈り物の受取りは仲介の労の報いである）。

(30) 四語構成、主部（名詞句）＋述部（名詞句）。折り返し文 istighrāqu l-ghāyati majlabatu l-ghawāyati（目的のみが視野にあれば迷誤の原因とならん）。

(31) 四語構成、主部（名詞句）＋動詞＋目的語名詞。折り返し文 al-ḥaddu yukillu tajāwuza l-ḥaddi（鰐のきつ

65 価値＝地位が増加すれば配慮＝心配も高まる。述部（前置詞句）＋動詞＋主語。訳註（42）を参照。

66 人々を適材適所せば不測の事態に対応できよう。述部（前置詞句）＋動詞＋主語。訳註（41）を参照。

67 貧困(ḥājah 大事なもの、必要なもの)に窮すれば固執することも無くなろう。述部（前置詞句）＋動詞＋主格名詞。訳註（40）参照。

68 政治と共に支配階級はしつけられる。述部（前置詞句）＋動詞＋主格名詞。訳註（39）参照。

69 智慧の長＝第一は思考を磨くことである。主部（名詞句）＋述部（名詞句）。訳註（38）を参照。

70 希求を長くするは行為を短かくすることになる。五語構成。主部（名詞句）＋述部（前置詞句）。訳註（37）を参照。

71 神の摂理による栄誉は地位を持たらす。主部（名詞句）＋述部（前置詞句）。訳註（36）を参照。

72 権威を向上させるには危険に身を投ずること。同音異義語 axṭār（権威、危険）の二語がここでは交代して用いられている。主部（名詞句）＋述部（前置詞句）。訳註（35）を参照。

73 地位の昇格は不信をも高めるもの。主部（名詞句）＋動詞＋目的格名詞。訳註（34）参照。

74 'uqūq（分断、分裂、⑦では抗弁）に手を貸さぬが権利を産む。主部（名詞句）＋動詞＋目的格名詞。訳註（33）を参照。

75 善行を忘失するは教養あるもそれを帳消しにするもの。主部（名詞句）＋動詞＋目的格名詞。訳註（32）を参照。

76 境界^のの程を失するは勇敢さを鈍くさせることになる。ḥadd は「境界、刃先」の他に「強烈さ、勇敢」の意味がある。主文（名詞句）＋動詞＋目的格名詞。訳註（31）を参照。

77 目的から逸脱することは迷誤に陥ることになる。主部（名詞句）＋述部（名詞句）。訳註（30）を参照。

78 要求物を入手するは（さまざま）手段を駆使した末（に初めて）。主部（名詞句）＋述部（名詞句）。訳註（29）を参照。

79 贈与者の報いとなれるは賞讃に価する行為が広がることである。主部（名詞句）＋述部（名詞句）。訳註（28）を参照。

先は境界を越えれば鈍くなるもの)。ḥadd (劔のきつ先、境界) は同音異義語。

(32) 四語構成、主部 (名詞句) + 動詞 + 目的語名詞。折り返し文 al-qurabu yuḥbiṭu ta'addā l-adabi (善行あれど礼儀失すれば帳消しとなる)。

(33) 四語構成、主部 (名詞句) + 動詞 + 目的語名詞。折り返し文 al-'uqūqu yunshi'u tanāsiya l-ḥuqūqi (抗弁は当然な権利を忘失することから産まれる)。

(34) 四語構成、主部 (名詞句) + 動詞 + 目的語名詞。折り返し文 ar-rutabu yarfa'u taḥāshiya r-rayabi (地位を高めんとするなら嫌疑に近づかぬこと)。

(35) 四語構成、主部 (名詞句) + 述部 (前置詞句)。折り返し文 iqtihāmu l-axṭāri bi-rtifa'i l-axṭāri (危険の中に身を投ずるは己の権威を高めるために必要)。axṭār (権威、危険) は同音異義語。

(36) 四語構成、主部 (名詞句) + 述部 (前置詞句)。折り返し文 mu'ātātu l-aqdāri bi-tanawwuhi l-aqdāri (神の摂理の助けは己の地位の向上に必要)。aqdār (地位 qadar の複数、神の摂理 qadr の複数)。

.....
80 中傷者に報酬を与えることは支配者の憎悪 (に繋がる)。主部 (名詞句) + 述部 (名詞句)。訳註 (27) を参照。

81 人の上に立つ者の飾り = 用件は胸の広きこと。ṣadr (人の上に立つ者、胸) の両義がここでは反対に用いられている。主部 (名詞句) + 述部 (名詞句)。訳註 (26) を参照。

82 日々の糧得るを利するは神の加護を容易にすること。主部 (名詞句) + 動詞 + 目的格名詞。faql を主語に持ってくることで動詞の性の一致が保たれたことになる。訳註 (25) 参照。

83 報酬 (得る) を固く信ずるならば面倒な仕事も容易となろう。主部 (名詞句) + 動詞 + 目的格名詞、訳註 (24) を参照。

84 他人に乞うことを自制すれば贈り物を受ける価値があろう。takalluf は一方では「進んで引受けること」(順文⑱) に対し、ここでは「自制すること」の反義を内包する語である。主部 (名詞句) + 述部 (名詞句)。訳註 (23) を参照。

85 贈与を惜しみ無くすればその意図がそのまま伝わろう。主部 (名詞句) + 述部 (名詞句)。訳註 (22) を参照。

86 友情が真執ならば失敗するは避けられよう。主部 (名詞句) + 動詞 + 目的格名詞。ここも主語が mawaddāt という女性名詞から xulūṣ という男性名詞に代ることにより、動詞の性の一致が守られたことになる。訳註 (21) を参照。

87 欠点をくり返すならば難詰するに最悪。主部 (名詞句) + 述部 (名詞句)。訳註 (20) を参照。

88 安全を求めて止まぬは意志の手綱となる。主部 (名詞句) + 述部 (名詞句)。訳註 (19) を参照。

89 自制に徹するは欲望との距離をへだつ。主部 (名詞句) + 動詞 + 目的格名詞。訳註 (18) を参照。

90 性^{さが}悪しきは被造物 = 人間の不名誉。主部 (名詞句) + 述部 (名詞句)。訳註 (17) を参照。

91 精神の怠惰なるは愛をも病ましめる。主部 (名詞句) + 述部 (名詞句)。訳註 (16) を参照。

92 聴衆の心に綱張るは弁論の魅力。主部 (名詞句) + 述部 (名詞句)。訳註 (15) を参照。

93 弁舌のさわやかさは会話を飾る。主部 (名詞句) + 述部 (名詞句)。訳註 (14) を参照。

94 衷心からの忠告は友情を伴うもの。主部 (名詞句) + 動詞 + 目的格名詞。訳註 (13) 参照。

95 心からの愛情を絆とするは礼儀正しさを要するもの。主部 (名詞句) + 動詞 + 目的格名詞。カフカリーでは muṣāfāt が主語となり、動詞も女性に変わらなければならない所、その前に 'aqd

(37) 五語構成、主部（名詞句）＋述部（前置詞句）。折り返し文 taqşiru l-âmali fi sharafi l-a'mali（願望少なくすれば振舞いの気高さに通じよう）。

(38) 四語構成、主部（名詞句）＋述部（名詞句）。折り返し文 tanqihu l-hikmatî 'itâlatu l-fikrî（智恵を磨くためには思考を長くすることである）。

(39) 四語構成、主部（名詞句）＋述部（名詞句）。折り返し文 tahadhdhubu s-siyâsati ra'su r-ri'âsati（政事を瑕無く行なう者こそ支配階級の長たる者）。

(40) 四語構成、述部（前置詞句）＋動詞＋主語名詞。折り返し文 al-hâjatu tulghâ ma'a l-lajâjati（大事なものは些事に固執することと共に失なわれる）。

(41) 四語構成、述部（前置詞句）＋動詞＋主語名詞。折り返し文 tatafâḍalu r-rijâli 'inda l-awjâli（人それぞれの対処の違い（を明らかにする）は不測の事態に陥った時）。

(42) 四語構成、述部（前置詞句）＋動詞＋主語名詞。折り返し文 al-qiyamu tatafâwatu bi-tafâḍuli l-himami（人

（絆）という男性名詞が置かれたことにより、これが主語となるため、動詞はそのまま男性形で済むことになった。訳註（12）を参照。

㉔㉔ 歡喜を表わするは寛大さの光となる。主部（名詞句）＋述部（名詞句）。訳註（11）を参照。

㉔㉕ 幸福の指標となるは感謝の成果（の積み重ね）。主部（名詞句）＋述部（名詞句）。訳註（10）を参照。

㉔㉖ 他人からの賞讃を勝ち得るのは高貴なる者の宝となる。主部（名詞句）＋述部（名詞句）。訳註（9）を参照。

㉔㉗ 足るを知る者の品性は善行にあり。主部（名詞句）＋述部（名詞句）。訳註（8）を参照。

の価値は配慮に優けると共に高まるもの)。qiyamu (価値) は qimat の複数形。

(43) 四語構成、述部 (前置詞句) + 動詞 + 主語名詞。折り返し文 at-tadbiru yahinu bi-tazayyudi s-safiri (使命は使用者の用向き多々あると共に弱まることになる)。

(44) 四語構成、述部 (前置詞句) + 動詞 + 主語名詞。折り返し文 al-ahwālu tatabayyanu bi-xalali l'-ahwāli [(臣民の) 恐怖は (権力者の) 不公平の乱用によってまき起こされるもの]。

qahqariyyah原文 (1) Dār Sādir (ベイルート) 版 pp.147~148

番号は訳者が付す。①~⑤⑩は順文、⑤⑪~⑩⑩は語ごと回文。

① الإنسانُ . صَنِيعَةُ الإِحْسَانِ . ② وَرَبُّ الْحَمِيلِ . فِعْلُ النَّدْبِ .
③ وَشِيمَةُ الْحُرِّ . ذَخِيرَةُ الْحَمْدِ . ④ وَكَسْبُ الشُّكْرِ . اسْتِثْمَارُ السَّعَادَةِ .
⑤ وَعُنْوَانُ الْكَرَمِ . تَبَاشِيرُ الْبَشْرِ . ⑥ وَاسْتِعْمَالُ الْمُدَارَاةِ يُوجِبُ
المُصَافَاةَ . ⑦ وَعَقْدُ الْمَحَبَّةِ يَقْتَضِي النُّصْحَ . ⑧ وَصِدْقُ الْحَدِيثِ .
⑨ وَفَصَاحَةُ الْمَنْطِقِ . سِحْرُ الْأَلْسَابِ . ⑩ وَشَرَكُ الْهَوَى .
آفَةُ النَّفُوسِ . ⑪ وَمَمْلَكُ الْخَلَائِقِ . شَيْنُ الْخَلَائِقِ . ⑫ وَسَوْءُ الطَّمَعِ .
يُبَايِنُ الْوَرَعَ . ⑬ وَالتِّزَامُ الْحَزَامَةُ . زِمَامُ السَّلَامَةِ . ⑭ وَتَطَلُّبُ الْمَثَالِبِ .
شَرُّ الْمَعَائِبِ . ⑮ وَتَتَبُّعُ الْعَشْرَاتِ . يُدْخِلُ حِصْصَ الْمَوَدَّاتِ . ⑯ وَخُلُوصُ
النِّيَّةِ . خُلَاصَةُ الْعَطِيَّةِ . ⑰ وَتَهْنِئَةُ النَّوَالِ . ثَمَنُ السَّوَالِ . ⑱ وَتَكْلُفُ
الْكُلْفِ . يُسَهِّلُ الْخَلْفَ . ⑲ وَتَيَقُّنُ الْمَعُونَةِ . يُسَنِّنِي الْمَوْوَنَةِ . ⑳ وَفَضْلُ
الصَّدْرِ . سَعَةِ الصَّدْرِ . ㉑ وَزِينَةُ الرُّعَاةِ . مَقْتُ السُّعَاةِ . ㉒ وَجَزَاءُ الْمَدَائِحِ .
بَثُّ الْمَنَائِحِ . ㉓ وَمَهْرُ الْوَسَائِلِ . تَشْفِيعُ الْمَسَائِلِ . ㉔ وَمَجْلِسَةُ الْغَوَايَةِ .
اسْتِغْرَاقُ الْغَايَةِ . ㉕ وَتَجَاوُزُ الْحَدِّ . يُكِلُّ الْحَدَّ . ㉖ وَتَعَدِّي الْأَدَبِ .
يُحْبِطُ الْقُرْبَ . ㉗ وَتَنَاسِي الْحَقُوقِ . يُنْشِي الْعُقُوقَ . ㉘ وَتَحَاشِي
يُحْبِطُ الْقُرْبَ . ㉗ وَتَنَاسِي الْحَقُوقِ . يُنْشِي الْعُقُوقَ . ㉘ وَتَحَاشِي

(45) 四語構成、述部（前置詞句）＋主部（名詞句）。折り返し文 thamaratu n-naṣri bi-mūjabī ṣ-ṣabri（勝利の果実は忍耐の分け前と共に）。

(46) 四語構成、主部（名詞句）＋述部（前置詞句）。折り返し文 bi-ḥasabi l-ijtihādi istiḥqāqu l-iḥmādi（さらなる努力ひき出すは人を褒めそやして利すること）。

(47) 四語構成、主部（名詞句）＋述部（名詞句）。折り返し文 kifa'u l-muḥāfazati wujūbu l-mulāḥazati（長き

qahqariyyah原文 (2) 同pp.149～150

الرَّيِّبِ . يَرْفَعُ الرُّتَبَ . ²⁹وَأَرْتِفَاعُ الْأَخْطَارِ . بِإِقْتِحَامِ الْأَخْطَارِ .
وَتَنْوَهُ الْأَقْدَارِ . بِمُؤَاتَاةِ الْأَقْدَارِ . ³¹وَشَرَفُ الْأَعْمَالِ . فِي تَقْصِيرِ
الْأَمَالِ . ³²وَإِطَالَةِ الْفِكْرَةِ . ⁷⁰تَنْقِيحِ الْحِكْمَةِ . ³³وَرَأْسِ الرِّئَاسَةِ .
تَهْدُبُ السِّيَاسَةِ . ³⁴وَمَعَ اللَّجَاجَةِ . تُلْغَى الْحَاجَةُ . ³⁵وَعِنْدِ الْأَوْجَالِ .
تَتَفَاضَلُ الرِّجَالُ . ³⁶وَبِتَفَاضُلِ الْهِمَمِ . تَتَفَاوَتُ الْقِيَمُ . ³⁷وَبِتَزْيِيدِ
السَّفِيرِ . يَسْهِنُ التَّدْبِيرُ . ³⁸وَبِخِلَالِ الْأَحْوَالِ . ⁶⁴تَتَبَيَّنُ الْأَهْوَالُ .
³⁹وَبِمُوجِبِ الصَّبْرِ . ثَمَرَةُ النَّصْرِ . ⁶²وَأَسْتِحْقَاقِ الْإِحْمَادِ . بِحَسَبِ
الْاجْتِهَادِ . ⁴¹وَوُجُوبِ الْمُلَاحَظَةِ . كِفَاءُ الْمُحَافَظَةِ . ⁴²وَصَفَاءُ الْمَوَالِي .
بِتَعَهُدِ الْمَوَالِي . ⁴³وَتَحَلِّيِ الْمُرُوءَاتِ . بِحِفْظِ الْأَمَانَاتِ . ⁴⁴وَاخْتِبَارِ
الْإِخْوَانِ . بِتَخْفِيفِ الْأَحْزَانِ . ⁴⁵وَدَفْعِ الْأَعْدَاءِ . بِكَفِّ الْأَوْدَاءِ .
⁴⁶وَامْتِحَانِ الْعُقَلَاءِ . بِمُقَارَنَةِ الْجُهَلَاءِ . ⁴⁷وَتَبَصُّرِ الْعَوَاقِبِ . يُؤْمِنُ
الْمَعَاطِبَ . ⁴⁸وَاتَّقَاءِ الشُّنْعَةِ . يَنْشُرُ السُّمْعَةَ . ⁴⁹وَقُبْحِ الْحَقَاءِ . يُنَافِي
الْوَفَاءِ . ⁵⁰وَجَوْهَرِ الْأَحْرَارِ . عِنْدَ الْأَسْرَارِ .

保身を十分とするは監視を怠り無くすること)。

(48) 四語構成、主部(名詞句)＋述部(前置詞句) 折り返し文 bi-ta'ahhudi l-mawālī ṣafā'u l-muwālī (主人に絶えることなく出仕すれば召使いの常日項の真心の顕われとなる)。

(49) 四語構成、主部(名詞句)＋述部(前置詞句)。折り返し文 bi-ḥafzi l-amānāti taḥallā l-murū'āti (信頼を保つためには雄男ぶりを発揮すること)。

(50) 四語構成、主部(名詞句)＋述部(前置詞句)。折り返し文 bi-taxfifi l-aḥzāni ixtibāru l-iḥwāni (危惧を軽くせんとせば兄弟を十分に知ることである)。

(51) 四語構成、主部(名詞句)＋述部(前置詞句)。折り返し文 bi-kaffi l-awiddā'i daf'u l-'adā'i (友の助けあらばこそ敵を追い払うことができる)。

(52) 四語構成、主部(名詞句)＋述部(前置詞句)。折り返し文 bi-muqāranati l-juhalā'i imtiḥānu l-uqalā'i (愚かな者を共に混えてこそ賢き者を試すことになる)。

〔訳者解説〕

第17話は物語りの展開としてはプロット・動きの少ないものである。マカーマとなる地名は定かではない。はるかに遠い所とあるから、前作同様マグリブのどこかということになる。人々の集まり(それは主人公の稼ぎの対象でもあるが)はここでは知的な若者達の一団である。談論風発する場に誘われて、語り手アル・ハーリスも聞き手として加わるということになる。するとこの一団の中心に主人公アブー・ザイド老人が既におり、この若者達の謎解きも含めた議論の挑戦を受けて、見事な受答えをしていることが分る。議論が尽きたところで、逆に老人から提案があった。「カフカリー書簡を作ってくれないか」という提案であった。カフカリー書簡とは後で詳しく説明するが、回文の1種で、単語単位で後ろから読んでも有意の文を作り出す作文技法である。知的な若者達は時間を与えられ、試行錯誤して作ろうとするが皆失敗する。頃合いを見計らって老人が自分には既に作品としてでき上っているが、という。一同は是非見せて欲しい、私達はそれに対して報酬を与えましょうからと申し出る。こうして報酬の確約がなされると、老人は200語50文からなるカフカリー書簡を披歴する。そしてそれらを一同に書き留めさせた後、例を示しながら、後ろからの読み方を説明する。順文もカフカリー文も一つ一つが処世訓、警句から成る見事な出来ばえである。(訳出に際し、順文は①～⑤⑨の、カフカリー文は㉔から㉙の番号を付した)。若者達はカフカリー文を点検し、文法に留意して内容を追ってゆき、その高雅さに圧倒される。そして所持した金品を老人に報酬として差し出す。語り手アル・ハーリスも差し出すと、老人は「弟子からは受取れぬ」と拒ばれる。この時点で老人が旧知の変わり果てたアブー・ザイドであることにアル・ハーリスは気付く。老人はアル・ハーリスも含めて一同に身の上を詩で歌った後、慕い蕉がれる一同を後に、意気揚々と引き上げてゆく。

第17話のマカーマの標題はal-Qahqariyyahとなっている。普通のマカーマの標題はアラブ・イスラム世界の地名が付される。というのも主人公アブー・ザイドは放浪する旅の先々の人々の集まりで(これがマカーマの意味であるが)あらゆる手段を用いて稼ぎを行なう設定であるから。第17話にして初めて、地名を標題に用いなかったのは、主題そのものをタイトルに用いたかったからであろう。物語り性よりもこの修辞技法こそ本マカーマの目玉なのだ。標題のqahqarとは「後ろ向きに歩く、後退^{あとずさ}る」ことであり、この原義の通り200の語を50個にわたる文章にまとめ、単語単位での回文を成立させ、順逆ともに文意を損ねることなく成立させている。

この驚嘆すべき技芸は50個の個々の文内でも成立している(①から⑤⑨の訳註にそれを訳出しておいた)。し

(53) 四語構成、主部（名詞句）＋動詞＋目的格名詞。折り返し文 al-ma'āṭibu tu'minu tabaṣṣura l-'awāqibi（破滅は結果を見守ることから妨がれよう）。ma'āṭibu（破滅）は ma'tab の複数形。従って動詞は女性形に変わる。

(54) 四語構成、主部（名詞句）＋動詞＋目的格名詞。折り返し文 as-sum'atu tanshuru ittiqā'a s-shun'ati（名声は醜聞から身を持せば広まろう）。主語は女性に変わり、動詞も変化。

(55) 四語構成、主部（名詞句）＋動詞＋目的格名詞。折り返し文 al-wafā'u yunāfi qubḥa l-jafā'i（誠実なる約束の履行は下品なる墮落行為とは距離あり）。

(56) 四語構成、主部（名詞句）＋述部（前置詞句）。折り返し文 al-'asrāru 'inda jawhari l-'ahrāri（秘密守られるは高貴なる者の奥義の許にこそ）。

(57) 後ろからの読みは、ここでは各文で行なうのではなく二百語終わった最後尾からやっつけてのけている！しかも三語構成のため、後ろから四語目の jawhar は、次の文頭に来る算段となる。三語構成、主語＋述部（前置詞句）。註（56）参照。

かし作者アル・ハリリーはカフカー技法において四語構成文の文頭に前文の末語を入れ、文末の語は次文に回して文意を成立させている。即ちカフカーにおいて四語構成文中一語を入れ、一語を次に回して二語入れ換えをしながらも意味内容を成立させているわけである。この驚ろくべき才知の結果は、紙に書き留め、それを見ながら長時間の労力の要る推敲を重ねた末であったろう。語単位での後ろからの読ませる qahqari 技法は、「後退さり技法」という直訳よりは「折り返し技法」と呼んだ方が良いだろう。というのも「後退さる」のは一定の範囲よりもさらに先に離れていってしまうことになる。文末まで行ったら、そこから折り返して文頭まで戻ってくるわけであるから「折り返し文」、「折り返し技法」と呼ぶことにする。

50×2の文意はどうであろうか。内容も世渡りの処世術、他人とのつき合い方、帝王学を含んだ一つ一つ味わいのある教訓、警句から成り、カフカーの方も内容的に決して劣ったものでなく、同格の気品ある内容となっている。

順文①～⑤⑨。語回文⑤①～⑤⑨の文体的特徴を指摘する。本文ではアブー・ザイド長老が200語を用いてのカフカー（折返し文）であると明白に述べている。そこで50個の文章が四語構成と概算すれば4×50=200で合点がゆく。しかし冒頭の第①文、及び回文の冒頭第⑤①文は三語構成となっている。それでは四語構成と見做すことは最初から崩れることになる。仕方なく、第①文から⑤⑨文まで何語構成かをその訳註の冒頭でそれぞれ言及することにした。その結果五語構成が第③④文に、回文では第⑦⑧文に見つかった。従って本文で述べられている通り200語での構成には間違いがないことが分った。即ち、三語構成①、⑤①、五語構成③、⑦⑧、残余はすべて四語構成の200語ということである。

さらに興味深いことが2点ある。その第1は五語構成③、⑦⑧の中にfiという前置詞が一語と算定されていることである。同様、前置詞ma'a ③④、⑥⑧、'inda ③⑤、⑥⑦、⑤⑨、⑤①等も一語と算定されている。しかし同じ前置詞でありながらbi ②⑨、⑦②、③⑩、⑦①などでは一語と算定されず、後続する名詞の付加詞としてしか扱かわれない。一子音文字はどんな品詞であれ、独立した一語とは見做されず、後続する語の語頭に付加される扱かいとなってしまう。wa（and 接続詞）、fa（and 接続詞）、li（for, to 前置詞、to 不定詞導入詞）ka（like 前置詞）などがそれである。従って語算定において、同じ品詞の前置詞や接続詞でありながら扱いが二分されることになる。

第2にテキスト文法が仿っていることである。つまりこの種の技巧文は冒頭文は三文字で始める慣例がある、との想定を立てることができることである。というのも⑤⑨文全部を唱し終り、一座の人々に書き留めさせた

(58) 註 (55) との違いは jawhar が主語の文頭に割り込み、また qubh が次文に移行するため訳も大分異なることになる。四語構成、主部 (名詞句) + 動詞 + 名詞 (目的格)。

(59) 註 (54) との違いは文頭に qubhu が加わり、文末の ittiqa' が次の文頭に回ることになる。四語構成、主部 (名詞句) + 動詞 + 目的格名詞。そのままの四語構成の回文では主語と動詞の性が合わなかったが、qabhu が主語の席になったので、性の統一が守られている。

(60) 註 (18) の原文三語に次文の語頭語 rabb が加わって折り返し文の最後を形成する。四語構成、主部 (名詞句) + 述部 (名詞句)。

(61) 「なにがしか」 原語 fildhah は「一部、部分」として用いられているが、原義は「ラクダの肝臓 (kabidu l-ba'ir) であって、また細長く細分されたラクダの肝臓」であり、ラクダが屠殺され、その部分部分が美味な食用肉として人々に供されていたことが背景にある。

(62) ハウラカ ḥawlaqa ムスリムの慣用表現。lā ḥawla wa-lā quwwata 'illā bi-llāhi (権能も力もアッラーに

後、アブー・ザイド長老は第51文からカフカリー (折り返し技巧文) を始めるに際しわざわざ第51文として、3語にとどめるよう指示している。この例示文が無ければ、(訳者が労力をそそいでカフカリー文を訳註で訳出していったように) 四語構成文なのであるから、第51文も四語で始めて良いはずだ。詩作品のテキスト文法は冒頭をmaṭla'u と言って、他の詩行にはない独特の形態をとるのもその一つである。全詩行の中、冒頭詩行のみ前半詩行と後半詩行の行末に脚韻をほどくことを行なう。こうしたことから、カフカリーの修辞の技法においても冒頭句は他より異なる法をあてはめたのではないか。順接の冒頭句を三語に、カフカリー (逆接) の冒頭句も三語にすべしと。

四語構成を三語で切り取って文章と成り立たせたために、さらに能力と技巧の要る作業が続く。51から60まで文頭と文末への配慮が続けられることになる。即ち、52は49の文末に51の残余の一語を加えて新たに文頭語とし、49の文頭語を外して53の文頭に持ってゆくことになる。即ち四語中半数の二語入れ変えを行なう文になってしまう。そうなると文法との合致、意味の具合はどうであろうかと危惧することになる。しかしこれすらも本文の終ったあとでカフカリー文を52から訳出しておいたように、見事に克服しているのである！驚異という他はない。本文中の訳註で指摘しておいた主部、述部の性の不一致〔5例⑥、⑮、⑲、④7、④8〕も、一語付加された男性名詞を主語にすることによってすべて解消されているのである。

さて、順文①～50、カフカリー文51～60までの構文の分析をここでやっておく。

〔1〕 主部に注目してみる。それがすべて名詞 + 名詞の名詞句で構成されている場合。この作例は6例 (×2) を除き、44 (×2) 例に上っている。作文上最も平易に作り出される技法ではある。但し形式であって、意味も文意として統一ある名詞を選ばなければならない点は多大な才知を要しよう。例外の6×2例は三語文の①、51も含めて、34、38、39、37、36、35、33、32、31の、すべて一語の名詞を用いて主語を形成しているものである。また主部には例外も含めて主格代名詞は一切用いられていないことも注目される。これは四語という制限の中で内容ある文意を作り上げる上では代名詞は一語として扱ってしまうと、その意味内容が狭く限定されてしまうから、と思われる。代名詞を用いるより普通名詞を用いて、内容をできるだけ多く盛り込んだ方が短文の特徴を出せようという理由によるものであろう。

〔2〕 次に述部に焦点をあてる。述部の特徴は4点あげられる。

〔2-1〕 述部は名詞 + 名詞の名詞句で成立するもの。これは50×2例中、以下で説明する動詞文、前置詞文の例を除き、最多の16例に上る。主部の名詞句に対応して述部の名詞句は名詞を2つ並べて成立するので、作

よる以外には無い)と言う事。人間の卑力、か弱さを言う時、この表現を用いる。

(63) イスティルジャーウ *istirjā* これも慣用表現。innā li-llāhi wa-innā 'ilay-hi rāji'ūna (げに我らアッラーに帰属し、彼の許に戻り行く者)と唱えること。人間の被創造物性、受動性を訴えたもので、神の助けにすがりたい時唱える。特に葬儀の場で遺族に対して、ねぎらいの言葉として用いられる。

(64) 「衣の両裾を……両腕を振りながら」は意気揚々とした様、得意気、自慢気を態度に出す時の表現。

(65) 「サバーの一团」*ayādi sabā* 古代イエメンのサバー王国は巨大なダムを建設して農耕地を作り出し、また首都マアリブを築いて富み、栄え、有名なシバの女王バルキースの時代は絶頂期を現出した。(シバとはサバーが訛ったもの、ヘブライ語から広がった)。後三世紀頃、突如としてダムが決壊し、すべてが崩壊して、サバーの住民は四散してしまった。人々はアラビア半島の北に遊牧部族として拡散して、アラブ南族を形成してゆくことになる。ここでは慌^{あわ}ただしく解散する様の形容として用いられている。

文技巧としては最も平易なものであり、意味内容だけ留意すれば作り出してゆけるものである。しかしこれも回文の形式、内容への二重の配慮が必要であることは言うまでもない。

〔2-2〕 述部は動詞を用い、目的格名詞をそれに続く形で成立するもの。これは50×2例中、⑥、⑦、⑨、⑫、⑬、⑮、⑯、⑰、⑱、⑲、⑳、㉑、㉒、㉓、㉔、㉕、㉖、㉗、㉘、㉙、㉚、㉛、㉜、㉝、㉞、㉟、㊱、㊲の13×2例を占める。動詞を用いるのは文意の配慮のみならず主語との関係で性数を合致させなければならない、一文内のカフカリーでは不一致が見られる点、訳註に指摘しておいた通りである。また動詞の導入は用法としても相当限定されており、目的語が主語となった場合、動詞をそのままの形で用いられうるかを想定した上で使用されねばならず、技法上名詞の使用よりも大変な能力を要するものである。

〔2-3〕 述部は前置詞+名詞(+名詞)の前置詞句より成り立つもの。これは名詞句の16×2例に次ぐ15×2例に上る(㉑、㉒、㉓、㉔、㉕、㉖、㉗、㉘、㉙、㉚、㉛、㉜、㉝、㉞、㉟、㊱、㊲、㊳、㊴、㊵、㊶、㊷、㊸、㊹、㊺、㊻、㊼、㊽、㊾、㊿、㋀、㋁、㋂、㋃、㋄、㋅、㋆、㋇、㋈、㋉、㋊、㋋、㋌、㋍、㋎、㋏、㋐、㋑、㋒、㋓、㋔、㋕、㋖、㋗、㋘、㋙、㋚、㋛、㋜、㋝、㋞、㋟、㋠、㋡、㋢、㋣、㋤、㋥、㋦、㋧、㋨、㋩、㋪、㋫、㋬、㋭、㋮、㋯、㋰、㋱、㋲、㋳、㋴、㋵、㋶、㋷、㋸、㋹、㋺、㋻、㋼、㋽、㋾、㋿、㌀、㌁、㌂、㌃、㌄、㌅、㌆、㌇、㌈、㌉、㌊、㌋、㌌、㌍、㌎、㌏、㌐、㌑、㌒、㌓、㌔、㌕、㌖、㌗、㌘、㌙、㌚、㌛、㌜、㌝、㌞、㌟、㌠、㌡、㌢、㌣、㌤、㌥、㌦、㌧、㌨、㌩、㌪、㌫、㌬、㌭、㌮、㌯、㌰、㌱、㌲、㌳、㌴、㌵、㌶、㌷、㌸、㌹、㌺、㌻、㌼、㌽、㌾、㌿、㍀、㍁、㍂、㍃、㍄、㍅、㍆、㍇、㍈、㍉、㍊、㍋、㍌、㍍、㍎、㍏、㍐、㍑、㍒、㍓、㍔、㍕、㍖、㍗、㍘、㍙、㍚、㍛、㍜、㍝、㍞、㍟、㍠、㍡、㍢、㍣、㍤、㍥、㍦、㍧、㍨、㍩、㍪、㍫、㍬、㍭、㍮、㍯、㍰、㍱、㍲、㍳、㍴、㍵、㍶、㍷、㍸、㍹、㍺、㍻、㍼、㍽、㍾、㍿、㏀、㏁、㏂、㏃、㏄、㏅、㏆、㏇、㏈、㏉、㏊、㏋、㏌、㏍、㏎、㏏、㏐、㏑、㏒、㏓、㏔、㏕、㏖、㏗、㏘、㏙、㏚、㏛、㏜、㏝、㏞、㏟、㏠、㏡、㏢、㏣、㏤、㏥、㏦、㏧、㏨、㏩、㏪、㏫、㏬、㏭、㏮、㏯、㏰、㏱、㏲、㏳、㏴、㏵、㏶、㏷、㏸、㏹、㏺、㏻、㏼、㏽、㏾、㏿、㐀、㐁、㐂、㐃、㐄、㐅、㐆、㐇、㐈、㐉、㐊、㐋、㐌、㐍、㐎、㐏、㐐、㐑、㐒、㐓、㐔、㐕、㐖、㐗、㐘、㐙、㐚、㐛、㐜、㐝、㐞、㐟、㐠、㐡、㐢、㐣、㐤、㐥、㐦、㐧、㐨、㐩、㐪、㐫、㐬、㐭、㐮、㐯、㐰、㐱、㐲、㐳、㐴、㐵、㐶、㐷、㐸、㐹、㐺、㐻、㐼、㐽、㐾、㐿、㑀、㑁、㑂、㑃、㑄、㑅、㑆、㑇、㑈、㑉、㑊、㑋、㑌、㑍、㑎、㑏、㑐、㑑、㑒、㑓、㑔、㑕、㑖、㑗、㑘、㑙、㑚、㑛、㑜、㑝、㑞、㑟、㑠、㑡、㑢、㑣、㑤、㑥、㑦、㑧、㑨、㑩、㑪、㑫、㑬、㑭、㑮、㑯、㑰、㑱、㑲、㑳、㑴、㑵、㑶、㑷、㑸、㑹、㑺、㑻、㑼、㑽、㑾、㑿、㒀、㒁、㒂、㒃、㒄、㒅、㒆、㒇、㒈、㒉、㒊、㒋、㒌、㒍、㒎、㒏、㒐、㒑、㒒、㒓、㒔、㒕、㒖、㒗、㒘、㒙、㒚、㒛、㒜、㒝、㒞、㒟、㒠、㒡、㒢、㒣、㒤、㒥、㒦、㒧、㒨、㒩、㒪、㒫、㒬、㒭、㒮、㒯、㒰、㒱、㒲、㒳、㒴、㒵、㒶、㒷、㒸、㒹、㒺、㒻、㒼、㒽、㒾、㒿、㓀、㓁、㓂、㓃、㓄、㓅、㓆、㓇、㓈、㓉、㓊、㓋、㓌、㓍、㓎、㓏、㓐、㓑、㓒、㓓、㓔、㓕、㓖、㓗、㓘、㓙、㓚、㓛、㓜、㓝、㓞、㓟、㓠、㓡、㓢、㓣、㓤、㓥、㓦、㓧、㓨、㓩、㓪、㓫、㓬、㓭、㓮、㓯、㓰、㓱、㓲、㓳、㓴、㓵、㓶、㓷、㓸、㓹、㓺、㓻、㓼、㓽、㓾、㓿、㔀、㔁、㔂、㔃、㔄、㔅、㔆、㔇、㔈、㔉、㔊、㔋、㔌、㔍、㔎、㔏、㔐、㔑、㔒、㔓、㔔、㔕、㔖、㔗、㔘、㔙、㔚、㔛、㔜、㔝、㔞、㔟、㔠、㔡、㔢、㔣、㔤、㔥、㔦、㔧、㔨、㔩、㔪、㔫、㔬、㔭、㔮、㔯、㔰、㔱、㔲、㔳、㔴、㔵、㔶、㔷、㔸、㔹、㔺、㔻、㔼、㔽、㔾、㔿、㕀、㕁、㕂、㕃、㕄、㕅、㕆、㕇、㕈、㕉、㕊、㕋、㕌、㕍、㕎、㕏、㕐、㕑、㕒、㕓、㕔、㕕、㕖、㕗、㕘、㕙、㕚、㕛、㕜、㕝、㕞、㕟、㕠、㕡、㕢、㕣、㕤、㕥、㕦、㕧、㕨、㕩、㕪、㕫、㕬、㕭、㕮、㕯、㕰、㕱、㕲、㕳、㕴、㕵、㕶、㕷、㕸、㕹、㕺、㕻、㕼、㕽、㕾、㕿、㖀、㖁、㖂、㖃、㖄、㖅、㖆、㖇、㖈、㖉、㖊、㖋、㖌、㖍、㖎、㖏、㖐、㖑、㖒、㖓、㖔、㖕、㖖、㖗、㖘、㖙、㖚、㖛、㖜、㖝、㖞、㖟、㖠、㖡、㖢、㖣、㖤、㖥、㖦、㖧、㖨、㖩、㖪、㖫、㖬、㖭、㖮、㖯、㖰、㖱、㖲、㖳、㖴、㖵、㖶、㖷、㖸、㖹、㖺、㖻、㖼、㖽、㖾、㖿、㗀、㗁、㗂、㗃、㗄、㗅、㗆、㗇、㗈、㗉、㗊、㗋、㗌、㗍、㗎、㗏、㗐、㗑、㗒、㗓、㗔、㗕、㗖、㗗、㗘、㗙、㗚、㗛、㗜、㗝、㗞、㗟、㗠、㗡、㗢、㗣、㗤、㗥、㗦、㗧、㗨、㗩、㗪、㗫、㗬、㗭、㗮、㗯、㗰、㗱、㗲、㗳、㗴、㗵、㗶、㗷、㗸、㗹、㗺、㗻、㗼、㗽、㗾、㗿、㘀、㘁、㘂、㘃、㘄、㘅、㘆、㘇、㘈、㘉、㘊、㘋、㘌、㘍、㘎、㘏、㘐、㘑、㘒、㘓、㘔、㘕、㘖、㘗、㘘、㘙、㘚、㘛、㘜、㘝、㘞、㘟、㘠、㘡、㘢、㘣、㘤、㘥、㘦、㘧、㘨、㘩、㘪、㘫、㘬、㘭、㘮、㘯、㘰、㘱、㘲、㘳、㘴、㘵、㘶、㘷、㘸、㘹、㘺、㘻、㘼、㘽、㘾、㘿、㙀、㙁、㙂、㙃、㙄、㙅、㙆、㙇、㙈、㙉、㙊、㙋、㙌、㙍、㙎、㙏、㙐、㙑、㙒、㙓、㙔、㙕、㙖、㙗、㙘、㙙、㙚、㙛、㙜、㙝、㙞、㙟、㙠、㙡、㙢、㙣、㙤、㙥、㙦、㙧、㙨、㙩、㙪、㙫、㙬、㙭、㙮、㙯、㙰、㙱、㙲、㙳、㙴、㙵、㙶、㙷、㙸、㙹、㙺、㙻、㙼、㙽、㙾、㙿、㚀、㚁、㚂、㚃、㚄、㚅、㚆、㚇、㚈、㚉、㚊、㚋、㚌、㚍、㚎、㚏、㚐、㚑、㚒、㚓、㚔、㚕、㚖、㚗、㚘、㚙、㚚、㚛、㚜、㚝、㚞、㚟、㚠、㚡、㚢、㚣、㚤、㚥、㚦、㚧、㚨、㚩、㚪、㚫、㚬、㚭、㚮、㚯、㚰、㚱、㚲、㚳、㚴、㚵、㚶、㚷、㚸、㚹、㚺、㚻、㚼、㚽、㚾、㚿、㜀、㜁、㜂、㜃、㜄、㜅、㜆、㜇、㜈、㜉、㜊、㜋、㜌、㜍、㜎、㜏、㜐、㜑、㜒、㜓、㜔、㜕、㜖、㜗、㜘、㜙、㜚、㜛、㜜、㜝、㜞、㜟、㜠、㜡、㜢、㜣、㜤、㜥、㜦、㜧、㜨、㜩、㜪、㜫、㜬、㜭、㜮、㜯、㜰、㜱、㜲、㜳、㜴、㜵、㜶、㜷、㜸、㜹、㜺、㜻、㜼、㜽、㜾、㜿、㝀、㝁、㝂、㝃、㝄、㝅、㝆、㝇、㝈、㝉、㝊、㝋、㝌、㝍、㝎、㝏、㝐、㝑、㝒、㝓、㝔、㝕、㝖、㝗、㝘、㝙、㝚、㝛、㝜、㝝、㝞、㝟、㝠、㝡、㝢、㝣、㝤、㝥、㝦、㝧、㝨、㝩、㝪、㝫、㝬、㝭、㝮、㝯、㝰、㝱、㝲、㝳、㝴、㝵、㝶、㝷、㝸、㝹、㝺、㝻、㝼、㝽、㝾、㝿、㞀、㞁、㞂、㞃、㞄、㞅、㞆、㞇、㞈、㞉、㞊、㞋、㞌、㞍、㞎、㞏、㞐、㞑、㞒、㞓、㞔、㞕、㞖、㞗、㞘、㞙、㞚、㞛、㞜、㞝、㞞、㞟、㞠、㞡、㞢、㞣、㞤、㞥、㞦、㞧、㞨、㞩、㞪、㞫、㞬、㞭、㞮、㞯、㞰、㞱、㞲、㞳、㞴、㞵、㞶、㞷、㞸、㞹、㞺、㞻、㞼、㞽、㞾、㞿、㟀、㟁、㟂、㟃、㟄、㟅、㟆、㟇、㟈、㟉、㟊、㟋、㟌、㟍、㟎、㟏、㟐、㟑、㟒、㟓、㟔、㟕、㟖、㟗、㟘、㟙、㟚、㟛、㟜、㟝、㟞、㟟、㟠、㟡、㟢、㟣、㟤、㟥、㟦、㟧、㟨、㟩、㟪、㟫、㟬、㟭、㟮、㟯、㟰、㟱、㟲、㟳、㟴、㟵、㟶、㟷、㟸、㟹、㟺、㟻、㟼、㟽、㟾、㟿、㠀、㠁、㠂、㠃、㠄、㠅、㠆、㠇、㠈、㠉、㠊、㠋、㠌、㠍、㠎、㠏、㠐、㠑、㠒、㠓、㠔、㠕、㠖、㠗、㠘、㠙、㠚、㠛、㠜、㠝、㠞、㠟、㠠、㠡、㠢、㠣、㠤、㠥、㠦、㠧、㠨、㠩、㠪、㠫、㠬、㠭、㠮、㠯、㠰、㠱、㠲、㠳、㠴、㠵、㠶、㠷、㠸、㠹、㠺、㠻、㠼、㠽、㠾、㠿、㡀、㡁、㡂、㡃、㡄、㡅、㡆、㡇、㡈、㡉、㡊、㡋、㡌、㡍、㡎、㡏、㡐、㡑、㡒、㡓、㡔、㡕、㡖、㡗、㡘、㡙、㡚、㡛、㡜、㡝、㡞、㡟、㡠、㡡、㡢、㡣、㡤、㡥、㡦、㡧、㡨、㡩、㡪、㡫、㡬、㡭、㡮、㡯、㡰、㡱、㡲、㡳、㡴、㡵、㡶、㡷、㡸、㡹、㡺、㡻、㡼、㡽、㡾、㡿、㢀、㢁、㢂、㢃、㢄、㢅、㢆、㢇、㢈、㢉、㢊、㢋、㢌、㢍、㢎、㢏、㢐、㢑、㢒、㢓、㢔、㢕、㢖、㢗、㢘、㢙、㢚、㢛、㢜、㢝、㢞、㢟、㢠、㢡、㢢、㢣、㢤、㢥、㢦、㢧、㢨、㢩、㢪、㢫、㢬、㢭、㢮、㢯、㢰、㢱、㢲、㢳、㢴、㢵、㢶、㢷、㢸、㢹、㢺、㢻、㢼、㢽、㢾、㢿、㣀、㣁、㣂、㣃、㣄、㣅、㣆、㣇、㣈、㣉、㣊、㣋、㣌、㣍、㣎、㣏、㣐、㣑、㣒、㣓、㣔、㣕、㣖、㣗、㣘、㣙、㣚、㣛、㣜、㣝、㣞、㣟、㣠、㣡、㣢、㣣、㣤、㣥、㣦、㣧、㣨、㣩、㣪、㣫、㣬、㣭、㣮、㣯、㣰、㣱、㣲、㣳、㣴、㣵、㣶、㣷、㣸、㣹、㣺、㣻、㣼、㣽、㣾、㣿、㤀、㤁、㤂、㤃、㤄、㤅、㤆、㤇、㤈、㤉、㤊、㤋、㤌、㤍、㤎、㤏、㤐、㤑、㤒、㤓、㤔、㤕、㤖、㤗、㤘、㤙、㤚、㤛、㤜、㤝、㤞、㤟、㤠、㤡、㤢、㤣、㤤、㤥、㤦、㤧、㤨、㤩、㤪、㤫、㤬、㤭、㤮、㤯、㤰、㤱、㤲、㤳、㤴、㤵、㤶、㤷、㤸、㤹、㤺、㤻、㤼、㤽、㤾、㤿、㥀、㥁、㥂、㥃、㥄、㥅、㥆、㥇、㥈、㥉、㥊、㥋、㥌、㥍、㥎、㥏、㥐、㥑、㥒、㥓、㥔、㥕、㥖、㥗、㥘、㥙、㥚、㥛、㥜、㥝、㥞、㥟、㥠、㥡、㥢、㥣、㥤、㥥、㥦、㥧、㥨、㥩、㥪、㥫、㥬、㥭、㥮、㥯、㥰、㥱、㥲、㥳、㥴、㥵、㥶、㥷、㥸、㥹、㥺、㥻、㥼、㥽、㥾、㥿、㦀、㦁、㦂、㦃、㦄、㦅、㦆、㦇、㦈、㦉、㦊、㦋、㦌、㦍、㦎、㦏、㦐、㦑、㦒、㦓、㦔、㦕、㦖、㦗、㦘、㦙、㦚、㦛、㦜、㦝、㦞、㦟、㦠、㦡、㦢、㦣、㦤、㦥、㦦、㦧、㦨、㦩、㦪、㦫、㦬、㦭、㦮、㦯、㦰、㦱、㦲、㦳、㦴、㦵、㦶、㦷、㦸、㦹、㦺、㦻、㦼、㦽、㦾、㦿、㧀、㧁、㧂、㧃、㧄、㧅、㧆、㧇、㧈、㧉、㧊、㧋、㧌、㧍、㧎、㧏、㧐、㧑、㧒、㧓、㧔、㧕、㧖、㧗、㧘、㧙、㧚、㧛、㧜、㧝、㧞、㧟、㧠、㧡、㧢、㧣、㧤、㧥、㧦、㧧、㧨、㧩、㧪、㧫、㧬、㧭、㧮、㧯、㧰、㧱、㧲、㧳、㧴、㧵、㧶、㧷、㧸、㧹、㧺、㧻、㧼、㧽、㧾、㧿、㨀、㨁、㨂、㨃、㨄、㨅、㨆、㨇、㨈、㨉、㨊、㨋、㨌、㨍、㨎、㨏、㨐、㨑、㨒、㨓、㨔、㨕、㨖、㨗、㨘、㨙、㨚、㨛、㨜、㨝、㨞、㨟、㨠、㨡、㨢、㨣、㨤、㨥、㨦、㨧、㨨、㨩、㨪、㨫、㨬、㨭、㨮、㨯、㨰、㨱、㨲、㨳、㨴、㨵、㨶、㨷、㨸、㨹、㨺、㨻、㨼、㨽、㨾、㨿、㩀、㩁、㩂、㩃、㩄、㩅、㩆、㩇、㩈、㩉、㩊、㩋、㩌、㩍、㩎、㩏、㩐、㩑、㩒、㩓、㩔、㩕、㩖、㩗、㩘、㩙、㩚、㩛、㩜、㩝、㩞、㩟、㩠、㩡、㩢、㩣、㩤、㩥、㩦、㩧、㩨、㩩、㩪、㩫、㩬、㩭、㩮、㩯、㩰、㩱、㩲、㩳、㩴、㩵、㩶、㩷、㩸、㩹、㩺、㩻、㩼、㩽、㩾、㩿、㪀、㪁、㪂、㪃、㪄、㪅、㪆、㪇、㪈、㪉、㪊、㪋、㪌、㪍、㪎、㪏、㪐、㪑、㪒、㪓、㪔、㪕、㪖、㪗、㪘、㪙、㪚、㪛、㪜、㪝、㪞、㪟、㪠、㪡、㪢、㪣、㪤、㪥、㪦、㪧、㪨、㪩、㪪、㪫、㪬、㪭、㪮、㪯、㪰、㪱、㪲、㪳、㪴、㪵、㪶、㪷、㪸、㪹、㪺、㪻、㪼、㪽、㪾、㪿、㫀、㫁、㫂、㫃、㫄、㫅、㫆、㫇、㫈、㫉、㫊、㫋、㫌、㫍、㫎、㫏、㫐、㫑、㫒、㫓、㫔、㫕、㫖、㫗、㫘、㫙、㫚、㫛、㫜、㫝、㫞、㫟、㫠、㫡、㫢、㫣、㫤、㫥、㫦、㫧、㫨、㫩、㫪、㫫、㫬、㫭、㫮、㫯、㫰、㫱、㫲、㫳、㫴、㫵、㫶、㫷、㫸、㫹、㫺、㫻、㫼、㫽、㫾、㫿、㬀、㬁、㬂、㬃、㬄、㬅、㬆、㬇、㬈、㬉、㬊、㬋、㬌、㬍、㬎、㬏、㬐、㬑、㬒、㬓、㬔、㬕、㬖、㬗、㬘、㬙、㬚、㬛、㬜、㬝、㬞、㬟、㬠、㬡、㬢、㬣、㬤、㬥、㬦、㬧、㬨、㬩、㬪、㬫、㬬、㬭、㬮、㬯、㬰、㬱、㬲、㬳、㬴、㬵、㬶、㬷、㬸、㬹、㬺、㬻、㬼、㬽、㬾、㬿、㭀、㭁、㭂、㭃、㭄、㭅、㭆、㭇、㭈、㭉、㭊、㭋、㭌、㭍、㭎、㭏、㭐、㭑、㭒、㭓、㭔、㭕、㭖、㭗、㭘、㭙、㭚、㭛、㭜、㭝、㭞、㭟、㭠、㭡、㭢、㭣、㭤、㭥、㭦、㭧、㭨、㭩、㭪、㭫、㭬、㭭、㭮、㭯、㭰、㭱、㭲、㭳、㭴、㭵、㭶、㭷、㭸、㭹、㭺、㭻、㭼、㭽、㭾、㭿、㮀、㮁、㮂、㮃、㮄、㮅、㮆、㮇、㮈、㮉、㮊、㮋、㮌、㮍、㮎、㮏、㮐、㮑、㮒、㮓、㮔、㮕、㮖、㮗、㮘、㮙、㮚、㮛、㮜、㮝、㮞、㮟、㮠、㮡、㮢、㮣、㮤、㮥、㮦、㮧、㮨、㮩、㮪、㮫、㮬、㮭、㮮、㮯、㮰、㮱、㮲、㮳、㮴、㮵、㮶、㮷、㮸、㮹、㮺、㮻、㮼、㮽、㮾、㮿、㯀、㯁、㯂、㯃、㯄、㯅、㯆、㯇、㯈、㯉、㯊、㯋、㯌、㯍、㯎、㯏、㯐、㯑、㯒、㯓、㯔、㯕、㯖、㯗、㯘、㯙、㯚、㯛、㯜、㯝、㯞、㯟、㯠、㯡、㯢、㯣、㯤、㯥、㯦、㯧、㯨、㯩、㯪、㯫、㯬、㯭、㯮、㯯、㯰、㯱、㯲、㯳、㯴、㯵、㯶、㯷、㯸、㯹、㯺、㯻、㯼、㯽、㯾、㯿、㰀、㰁、㰂、㰃、㰄、㰅、㰆、㰇、㰈、㰉、㰊、㰋、㰌、㰍、㰎、㰏、㰐、㰑、㰒、㰓、㰔、㰕、㰖、㰗、㰘、㰙、㰚、㰛、㰜、㰝、㰞、㰟、㰠、㰡、㰢、㰣、㰤、㰥、㰦、㰧、㰨、㰩、㰪、㰫、㰬、㰭、㰮、㰯、㰰、㰱、㰲、㰳、㰴、㰵、㰶、㰷、㰸、㰹、㰺、㰻、㰼、㰽、㰾、㰿、㱀、㱁、㱂、㱃、㱄、㱅、㱆、㱇、㱈、㱉、㱊、㱋、㱌、㱍、㱎、㱏、㱐、㱑、㱒、㱓、㱔、㱕、㱖、㱗、㱘、㱙、㱚、㱛、㱜、㱝、㱞、㱟、㱠、㱡、㱢、㱣、㱤、㱥、㱦、㱧、㱨、㱩、㱪、㱫、㱬、㱭、㱮、㱯、㱰、㱱、㱲、㱳、㱴、㱵、㱶、㱷、㱸、㱹、㱺、㱻、㱼、㱽、㱾、㱿、㲀、㲁、㲂、㲃、㲄、㲅、㲆、㲇、㲈、㲉、㲊、㲋、㲌、㲍、㲎、㲏、㲐、㲑、㲒、㲓、㲔、㲕、㲖、㲗、㲘、㲙、㲚、㲛、㲜、㲝、㲞、㲟、㲠、㲡、㲢、㲣、㲤、㲥、㲦、㲧、㲨、㲩、㲪、㲫、㲬、㲭、㲮、㲯、㲰、㲱、㲲、㲳、㲴、㲵、㲶、㲷、㲸、㲹、㲺、㲻、㲼、㲽、㲾、㲿、㳀、㳁、㳂、㳃、㳄、㳅、㳆、㳇、㳈、㳉、㳊、㳋、㳌、㳍、㳎、㳏、㳐、㳑、㳒、㳓、㳔、㳕、㳖、㳗、㳘、㳙、㳚、㳛、㳜、㳝、㳞、㳟、㳠、㳡、㳢、㳣、㳤、㳥、㳦、㳧、㳨、㳩、㳪、㳫、㳬、㳭、㳮、㳯、㳰、㳱、㳲、㳳、㳴、㳵、㳶、㳷、㳸、㳹、㳺、㳻、㳼、㳽、㳾、㳿、㴀、㴁、㴂、㴃、㴄、㴅、㴆、㴇、㴈、㴉、㴊、㴋、㴌、㴍、㴎、㴏、㴐、㴑、㴒、㴓、㴔、㴕、㴖、㴗、㴘、㴙、㴚、㴛、㴜、㴝、㴞、㴟、㴠、㴡、㴢、㴣、㴤、㴥、㴦、㴧、㴨、㴩、㴪、㴫、㴬、㴭、㴮、㴯、㴰、㴱、㴲、㴳、㴴、㴵、㴶、㴷、㴸、㴹、㴺、㴻、㴼、㴽、㴾、㴿、㵀、㵁、㵂、㵃、㵄、㵅、㵆、㵇、㵈、㵉、㵊、㵋、㵌、㵍、㵎、㵏、㵐、㵑、㵒、㵓、㵔、㵕、㵖、㵗、㵘、㵙、㵚、㵛、㵜、㵝、㵞、㵟、㵠、㵡、㵢、㵣、㵤、㵥、㵦、㵧、㵨、㵩、㵪、㵫、㵬、㵭、㵮、㵯、㵰、㵱、㵲、㵳、㵴、㵵、㵶、㵷、㵸、㵹、㵺、㵻、㵼、㵽、㵾、㵿、㶀、㶁、㶂、㶃、㶄、㶅、㶆、㶇、㶈、㶉、㶊、㶋、㶌、㶍、㶎、㶏、㶐、㶑、㶒、㶓、㶔、㶕、㶖、㶗、㶘、㶙、㶚、㶛、㶜、㶝、㶞、㶟、㶠、㶡、㶢、㶣、㶤、㶥、㶦、㶧、㶨、㶩、㶪、㶫、㶬、㶭、㶮、㶯、㶰、㶱、㶲、㶳、㶴、㶵、㶶、㶷、㶸、㶹、㶺、㶻、㶼、㶽、㶾、㶿、㷀、㷁、㷂、㷃、㷄、㷅、㷆、㷇、㷈、㷉、㷊、㷋、㷌、㷍、㷎、㷏、㷐、㷑、㷒、㷓、㷔、㷕、㷖、㷗、㷘、㷙、㷚、㷛、㷜、㷝、㷞、㷟、㷠、㷡、㷢、㷣、㷤、㷥、㷦、㷧、㷨、㷩、㷪、㷫、㷬、㷭、㷮、㷯、㷰、㷱、㷲、㷳、㷴、㷵、㷶、㷷、㷸、㷹、㷺、㷻、㷼、㷽、㷾、㷿、㸀、㸁、㸂、㸃、㸄、㸅、㸆、㸇、㸈、㸉、㸊、㸋、㸌、㸍、㸎、㸏、㸐、㸑、㸒、㸓、㸔、㸕、㸖、㸗、㸘、㸙、㸚、㸛、㸜、㸝、㸞、㸟、㸠、㸡、㸢、㸣、㸤、㸥、㸦、㸧、㸨、㸩、㸪、㸫、㸬、㸭、㸮、㸯、㸰、㸱、㸲、㸳、㸴、㸵、㸶、㸷、㸸、㸹、㸺、㸻、㸼、㸽、㸾、㸿、㹀、㹁、㹂、㹃、㹄、㹅、㹆、㹇、㹈、㹉、㹊、㹋、㹌、㹍、㹎、㹏、㹐、㹑、㹒、㹓、㹔、㹕、㹖、㹗、㹘、㹙、㹚、



【図5】場が屋外設定になっている。飛んでいる鳥、及び天空と太陽が描かれているだけ。左手二人目が主人公アブー・ザイド。手ぶりから話しかけており、語回文を提案しているのであろう。



【図6】二本の大木の木陰で集う一団。一本は大型の丸い葉をつける木、一本は枝の両端に繁みを持つ木。立っている人物は語り手アル・ハーリス。視線は左端の人物アブー・ザイドの方を向いている。



【図7】より遠景から。三段構成で、下段は中央に池、両端に岩山。中央に一座の人々。上段に三本の大木。細かい葉を持つ木は両端のように、またより大きな葉を持つ木は中央のように描かれる。中央左端の立っている人物は主人公アブー・ザイド。



【図8】唯一屋内設定になっている。より原文に忠実に、左端の人物アブー・ザイドは己の作になる語回文の原文を膝の上に置き、一座の人々に説明を加えており、一同顔をそちらに向け聴き入っている様子がよく描かれている。